

魔法使いとカナリア

—ogiso sasa—

1 魔法使い

ムーラリア大陸の十二の王国の一つ、シアの国の城下町を歩く二つの影があった。石造りの建物が軒を連ねる道筋には、普段ならば人の往来が絶えることはない。だが、この日ばかりは皆、その二人が立ち去るのを息を潜めて、見守っていた。

しばらくして、王宮の門から追い立てられるようにして出て来た二人組は、そんな周囲の視線を気にする様子もなく、のんびりと人気のない街道を歩いていた。

一人は金色の髪の良い青年、そして、もう一つは赤毛の小さな男の子である。一見、何の繋がりもないように見える二人だったが、こうして並んで歩くのは、今が初めてではなかった。

自分の背丈よりもある荷物を背負った赤毛の少年は酷く不機嫌な顔をして、背の高い青年を見上げてぶつぶつと小言を並べ立てている。

「どうしていつも、いつも、いつも、城を追い出されるようなことばかりするんですか。よりもよって皇女(おうじょ)を口説いて虜にしてしまうなんて、いくら貴方がこの世で最初の魔法使いだとしても、やって良いことと悪いことがあるでしょう。今回は、たった一月ですよ。いつもいつもこんなことばかりしていたら、魔法使いに対する偏見は増すばかりじゃないですか。ただでさえ魔法使いを憎んでいる人が沢山いるというのに、貴方は一体何をしたいんですかっ」赤毛の少年、アレクは息切れがして言葉を途切れさせ、それでも収まらない怒りの余り、肩を震わせていた。

「特にしたいことなどないですが、目の前に妙齡(みょうれい)のそれも美しい姫がいたら、やはり口説きたくなるのは男として当然でしょう」

耳まで真っ赤にして怒り狂う少年を見下ろしながら、その青年、ファウストはさらりとそんな事を言う。そして、さらに少年の怒りを助長するように続ける。

「それに魔法使いとは、本来人間なんて嫌いな生き物ですし。今更イメージなど気にするような者などいないでしょう」

だが、ファウストの予想に反して、アレクはファウストに怒鳴り返さず、大きな溜息を一つ吐いた。

これ以上何を言っても無駄なことはもう実証済みなのだ。それでも、何か一言言わずにはいられない性分は変えられない。けれど、いつも城を追い出される理由が同じというのは、ものすごく情けない。この世界で最初にして最も偉大な魔法使いともあろうものが、こんなふうにしていつも城を追われているなんて、本当に情けない。

アレクは、自分かけられた呪いを解いて欲しくてファウストの側にいるのだが、一緒に旅を始めてすでに三年以上も経つと言うのに、一向に呪いを解いてもらえないことへの憤りも半分はあった。けれど、それでもアレクには彼しかないのだ。彼の悪癖については諦めるより他になかった。

「もういいです。それで、今度はどこに行くんです？」

アレクに呪いをかけたのはファウストではなかったが、彼以上の魔法使いはこの世にいなかった。最強にして、この世で最初の魔法使いになら、どんな呪いも解ける筈だと誰もが思うことだった。だから、アレクは彼に会えた時、これで呪いは解けるのだと思っていた。

だが、そこでアレクが知った現実は過酷なものだった。

魔法使いは、人とは違う生き物であり、彼らがどこから来たのか誰も知らないが、この国では魔法使いを知らぬ者はいない。人の常識とはかけはなれた奇跡を行える彼らは、決して人の世に自ら関わろうとはしないのだと言う。アレクのかたわらのこの人も、アレクの方から押しかけて供になったくらいである。

長く真っ直ぐな金色の髪とその魔法使いは、薄紫色の不思議な優しい光を放ちながら、アレクを見下ろした。

「久しぶりに我が家に戻ってみようと思います。王宮巡りも一段落したことですし、しばらくは、のんびりとするのも良いですね」

ファウストが何を考えているのかなんて、アレクには分からなかった。

三年も一緒にいて、分かったことと言えば、女グセが悪いことと、富や権力に興味が無いことくらいだった。ファウスト程の魔法使いならば、この世界の王になることなんて容易いはずなのに、決して自ら人間の世界に関わろうとはしなかった。人間を呪うのは、魔法使いだったが、魔法使いが望んで誰かを呪うことはなかった。いつも、誰かに頼まれて呪うのだという。人を呪うのは同じ人間なのだと、ファウストは皮肉な笑みを浮かべながら、アレクにそう教えてくれた。

「いつになったら僕は元に戻れるのかな」

アレクは小さく呟いたが、それはファウストの耳には届かないほど小さなもので、初めから返答を期待して言った訳ではなかった。

呪いをかけられてから十五年。いつまでも大人になれないアレクは、既に成人していてもおかしくない年齢になっていた。早く呪いを解いて戻らなければ何もかも失ってしまう。焦る思いとは裏腹にファウストはアレクに何も聞かないし、何もしない。だが、尋ねられたところで言うべきことなど何もないのだから、ファウストだけを責められないのも事実だった。

呪いのことは他言出来ない。もしもそれを自らの口で語ってしまうと、その呪いはもう二度と解けなくなってしまうからだ。

魔法使いの呪いとは、かけられた本人の言葉で完結するのだと言う。

自分が呪われていることを誰かに打ち明けることも出来ず、そのまま命を落す者は多くいた。人を呪うことに何の得があるのか、アレクには分からない。ただ、魔法使いは自らの意思で人を呪うことはないのだという。それは、魔法使いたちの暗黙のルールらしい。

人間が魔法使いに頼んで人間を呪う。そして、魔法使いはその依頼を受けて人間に呪いをかける。それが人間と魔法使いの決定的に違うところだった。

アレクは魔法使いだけが悪いのではないと、長い旅の間に納得していた。

「ファウストの家って、そういえば僕、初めてです」

こんな派手な人の家とは、一体どんなに豪華で絢爛な家なのか。今までずっと大陸中の国の王の宮城ばかりを渡り歩いてきたおかげで少しは想像がつくが、この魔法使いは、はっきり言って常識の通用しない所にいる人なのだ。

「というか、家なんてあったんですね」

アレクはさりげなくひどいことを言うが、言った本人に他意はない。

ファウストはそんなアレクの失言に、軽く笑って応える。

「そりゃあ、家くらいあります。ここから一番近い所だと、東の果ての森ですかね」

それは、ファウストのささやかな復讐なのか、アレクはその家の場所を聞いて青褪(あおざ)める。

「東の果てって、異界に繋がる門があるとかいう噂の、アレですか」

アレクはその森にまつわるよからぬ噂の数々を思い出しながら、このまま付いて行くのはやめようかな、と半分本気で考える。

東の果ての森とは、この大陸の真東にある太古の森で、この世の始まりの時からずっとそこにあると言われる森である。そこに足を踏み入れた者は二度と元と同じ姿では戻れないと言われ、ほとんどの者はそのまま戻って来ないのだと言われていた。しかも、森の中には凶暴な獣や魔物たちが棲みついでいて、迷い込んで来た人間を喰らうとか、そのまま異界に連れ去られて一生奴隷として働かされるとも言われている。

つまり、そこは魔法使い達の聖地とも呼ばれる人外魔境なのである。そんな場所に好き好んで入りたがる人間なんて、余程の事情が無い限りいないだろう。

「私の家に人間を招待するのは珍しいことではないのですよ。そんなに怯えなくともちゃんと生きて帰れますから安心してください」

何故、ここでそんな不吉な慰めを言うのか。優しく微笑みながら言われると、かえって二度と戻って来られなくなるような気がして、アレクの気概は削がれて行くばかりだった。が、ふと、アレクはファウストの言葉の中に疑問を感じた。

「一番近くって、言いましたよね。他にも家があるんですか」

「ああ、西の砂漠にもありますし、サンクチュアリ(禁獵)の森の中にも一つありますね。それに、中の高間の原にもかつては暮らしていたこともあります」

西の砂漠も、サンクチュアリの森も、東の果ての森と大して変わらない人外魔境である。そして、中の高間の原に至っては、神が住まう天の城のある所だと言われている所である。

神がこの地を去ってから久しく、今は神の一族の話は伝説でしか残っていないが、かつてこの世を統べていた神の一族が暮らしていた場所に、ファウストが暮らしていた。そんな荒唐無稽な話を果たして信じて良いものか、アレクはしばらく悩む。

「魔法使いとは一体何なんでしょう。神にも等しい力があると言うのなら、どうしてこの世を意のままにしようとしな
いのですか？」

アレクは、人間ならば誰もが望む王の座を欲しない魔法使いの心が理解出来なかった。

「そんな面倒なことを、どうしてしなければならないんです？ 私たちはかけがえのない伴侶を手に入れ、自由を手に入
れた。それだけで充分です」

ファウストは呆れたようにアレクを見て、そして楽しげに穏やかに笑う。

「何が可笑しいんです？」

アレクはファウストの笑う理由が分からないなりに不快感を感じていた。

ファウストは、アレクの真っ赤に燃えるような髪をそっと撫でると諭すように言う。

「もし仮に魔法使いがこの世を治めたとして、人間はその世界の中で何が出来ますか？ 初めは魔法使いの力を便利に
思うでしょう。だが、魔法使いは万能ではないし、人の都合ばかりで動くものでもない。理を曲げて辻褄を合わせよう
としても、最後には破綻するしかない。この世の終末が見たいと言うのなら、止めはしませんが」

と、ファウストは心底楽しそうに笑うが、その奥に得体の知れない黒いものが見えた気がして、アレクは背筋が寒く
なる。

「そんなことにならないように祈っていて下さいね。アレク」

ファウストは何を思ったのか、まじめな顔をして最後にそう呟き、そして、東の果ての森への道を選ぶ。

魔法使いが本気で世界を滅ぼそうとしたのなら、それを止められる人間なんているわけがなかった。ファウストの言
う通り、そんなことにならないように、人間には祈ることしか出来ないだろう。

この世界はアレクが思っていたよりもずっと複雑で、危うい均衡の上に成り立っているのだと、喉下(のどもと)に刃
をつきつけられたようで、冷やりとしながら、アレクはファウストの後を項垂れて歩くしかなかった。

東の果ての森へ向かう、アレクの足取りは重かった。

1 東の果ての森

東の果ての森に一番近い村、イーストエンドと呼ばれる村の中を、腰の曲がった老婆のような格好をした者が、杖を頼りにふらふらと村の往來を横切っていく。

村人達は見知らぬその者を遠巻きにして、誰一人としてその者に手を差し出そうとはしなかった。

まるで関わることを恐れているかのように、目を合わせぬように、それが通り過ぎるのをじっと待っているようだった。

全身がすっぽりと隠れるような古ぼけた灰色の外套の下で、リアはその視線に耐えるように口元を引き締める。

あの魔法使いが現れた時から全ては一変してしまった。

魔法使いの手が触れた場所が黒く染みになり、それが広がって膨らみ、そして固まった。その瘡の重みで頭は上がらず、腰は曲がってしまった。だが、醜い姿になったことよりも、誰かに恨まれていたことの方が辛かった。

解呪の旅に出てすぐに母が死に、そして父もつい先日死んだ。

魔法使いの呪いの所せいで全身に痣が広がり、今ではその痣が硬く瘤になり身体の自由を奪っていた。老婆のように腰が曲がり、顔の半分はごつごつとした岩のようになってしまっていた。見ただけで呪われていることが分かるこの残酷な呪いを解く方法を、リアは知っていた。けれど、どうしても、それが出来なかった。

そして、三日前に父が死に、リアはひとりぼっちでこの世に取り残された。

呪いを解く為に全てを捨てて、父と旅に出たのは一年前のことだった。母はリアが呪われて直ぐに病気になって死んでしまった。そして、自分もすぐに彼らの後を追うのだろう。

父が死んで宿を追い出された時、父の亡骸は近くの森に捨てられた。リアはその側を動くことも出来ずにひとしきり泣いた。そして、父の亡骸に不自由な両手で懸命に掻き集めた土を掛け、弔いをするのに三日かかった。

一人では満足に歩くことも出来なくなっていたリアは、父の亡骸の前からしばらく動けなかった。自分の為全てを投げ打って尽くしてくれたのに、結局呪いは解けなかった。それが悲しくて辛い。自分が一言頷いて、この呪いを受け入れれば、きっと父も母も死なずに済んだのかもしれない。

他の方法など最初から無かったのだ。

絶望は暗く重くリアの歩みを妨げた。けれど、リアは歩き続けた。誰の目にも留まらない死に場所を探して、父と母に詫びながら、ただひたすらに東の果ての森を目指した。

暗く鬱蒼とした森の中は、寒く静かだった。道などどこにも無いと思っていたのに、誰が通るためのものなのか、そこにははっきりと踏み固められた道があった。おかげでリアはつまずくこともなく先に進むことが出来た。一度でも転んでしまえば、もう一人で立ち上がることは出来ないだろう。立ち止まった所がリアの最期の場所になる。

森の中には自分以外の生き物の気配は全くなかったが、リアは寂しくは無かった。自分の足で歩ける所まで必死に生きて、そして、両親の待つ天国へ行きたい。それがリアの今の願いだった。

そして、リアはその森の中に空き家を見つけた。今は雨の少ない時期だったからしばらくは外で平気だったが、父の死から数日が経つと森の暗さが怖くなってきた。

このまま動けなくなってやがて死ぬのは分かっていたが、森の獣に襲われるのはやはり怖い。

日は既に西に傾き始めていた。

リアは重い足を引き摺るように歩き始めた。

自分の未来には死が目前に迫っているのに、それが少しも怖くないのは、もうこれ以上苦しまなくても済むからだろうか。先に逝ってしまった両親に会えるのだと思うと不思議に澄んだ心だった。

森の中は同じ景色がつつらと続き、自分がどの辺りにいるのかさえ分からなくなっていた。

空を覆う木々のせいで辺りは暗く、昼なのか、夜なのかさえも分からない。けれど、それでも歩き続けることが出来たのは、自分の足元に続く道のおかげだった。

この道がどこへ向っているのか、そんなことはもうどうでも良くなっていた。ただ、空腹と全身に走る鈍い痛みが、リアがまだ生きている証だと言うように、彼女を責め苛んでいた。

どれくらいの時が経っただろうか。

どこまでも続く闇の中に、微かな光が透けて見えた気がした。それは幻だったのかもしれないし、死の直前に見える天国への道標だったのかもしれない。

ここに人は住んでいないはずだった。それとも道を誤ったのだろうか。いつの間にか元に戻り、人里に帰って来てまったのか、方向の感覚が鈍くなっていた。

明かりはそれ一つだけで他には何も見えなかった。

何が現実で、何が幻なのか。朦朧とした頭ではその区別が付かなくなっていた。いつの間にかリアは、その明かりを放つ家の前に立っていた。

通り過ぎて来た村の民家のように、石と木で出来た可愛らしい小さな家だった。その窓から漏れる暖かな光の中に、人影が二つ浮かんでいた。背の高い綺麗な男の人と、小柄な赤髪の少年。食卓を囲む光景は幸せそうで、リアは不意に寂しさを感じた。

自分にもかつてはこんな暖かな場所があったことを思い出す。そして、今は一人きり闇の中にいる現実が戻って来る。

リアは音を立てないように窓に近付いて、そっと中を覗き込んだ。

清潔に掃除の行き届いた居間の暖炉には赤い火が踊り、その上の壁には見たこともない変な形の仮面が三つ掛けられていた。暖炉の炎が揺れる度に仮面の上に影が落ちて、それは笑っているようにも、怒っているようにも見えた。

部屋の隅にある飾り棚の中にはガラスの小瓶や、大小様々な大きさの瓶が並び、居間の中央から下がるランプの明かりが、キラキラと反射していた。大きな鍋からは湯気が立ち上り、食卓の上にはパンとスープ、そして、ワインのグラスがあった。

真ん中の大皿には木の実や果実が山と盛られている。その食卓を挟んで座る赤毛の少年が、相手の男の人に何かを必死に話しかける姿は、微笑ましい光景だった。

リアはそれを見て、なんて残酷な夢なんだろうと思う。

父が死んでから食事らしいものをした覚えがなく、ずっと歩き通しで死を覚悟していた自分には、もう二度と手に入れないものばかりがそこにあった。忘れたままだったなら、こんな卑屈な気分にならずに済んだのに、不意に自分が惨めで可哀相に思えてきて、涙が一筋、硬くなった頬を伝う。

リアはこれ以上そこにいられなくて、ゆっくりと窓から離れていた。

さっきまで辿って来た道はもう見えなくなっていた。けれど、構わず闇の中に向って歩き出した。歩みは遅く、果たして前に進めているのかも分からなかったが、少しでもあの明かりから遠ざかりたくて、必死に杖に縋った。

けれど、足元は暗く、木の根が張り出していることに気が付かず、リアはバランスを崩して派手に倒れこんでいた。打ち付けられるように地面に倒れたリアは、その激痛に呻き声を上げる。

息をする度に全身に痛みが走り、僅かの身動きも出来なかった。

これで自分は死ぬのだと思った。せめて、もう少し奥まで行けたなら、こんな無様な格好を誰にも見られずに済むのに、あの家からどれくらい離れられることが出来たのか、それだけが気懸りだった。

辺りはずっと闇に包まれていた筈なのに、更に暗くなったような気がした。そして、身体中の力が抜け落ちていくような感覚の中で、リアは意識を手放していた。

2 東の果ての森

暖かな光に包まれた家の中は、すっかり掃除され炉には赤々と火が燃えていた。天井にはぴかぴかのランプが吊され、その光が部屋の隅々まで照らしている。壁には異国のものらしい玉の飾りが幾つか掛かり、側の棚には色とりどりの小瓶が並ぶ。そして、不気味にぎょろりと目を剥いた仮面が一つ、場違いにそののどかな光景に影を落とす。

小柄な赤毛の少年が、竈の前に立ち、食事の支度をしていた。が、その小さな身体には大き過ぎるのか、背伸びをして鍋の中を覗き込んでいた。そして、その後ろのテーブルでは金の髪をした美しい青年がのんびりと玻璃のグラスでワインを飲みながら本を読んでいた。少年がテーブルに皿を並べた時も、パンの入った籠を置いた時も、ずっと本から目を逸らすことはなかった。

少年は青年のそんな態度には慣れているのか、文句一つ言わずに手際よく食事の支度を続けていたが、支度ができてテーブルにつくと、唐突に話し始めた。

「こっちだって好きで一緒にいるんじゃないから」

無然とそう言うと、アレクは八つ当たりでもするようにパンに齧り付いていた。

「どうしてあなたのような人が『偉大なる魔法使い』だなんて呼ばれるのか不思議です。世界一のナルシストだというのはわかりますけど…」

今日こそは言いたいこと全部言ってやろうと思っていたのに、家の外に誰かいるとメフィが言った。

彼女は山猫ほどの大きさの黒い猫である。毛並みは艶やかで大きな緑の目をしていて、彼女はファウストの魔物である。

アレクは、彼女の真実の姿を見たことはない。最初、ファウストに彼女のことを紹介されて、ひどく吃驚（びっくり）したことを覚えている。獣の形をしているのに、人の言葉を操ることのできる、不思議な生き物だった。

アレクは半信半疑で家の外に出て、そしてすぐ側の樫の根元に蹲る灰色の塊を見つけた。それは人の形をしていたが、その顔も体も厚い瘡蓋のようなもので覆われていた。そっと触れてみると岩のように硬い。

すぐ後ろに足音がして近付いてくる。そして、アレクの隣にファウストが立つ。アレクは一步引いて、ファウストに場所を譲ると不安そうに様子を伺った。

「生きてるの？」

「そのようですね。ですが、このままでは直ぐに死んでしまうでしょう」

そう言ってファウストは、見ただけで呪われていると分かるその人間を腕に抱き上げていた。見た目ほど重くはないのか、ファウストは軽々とその人間を運び、空いているベッドに横たえた。

ずっと着たきりだったのかボロボロの服は少し饅えた匂いがした。それは死臭に似ていたかもしれない。その服を躊躇なく脱がせていくファウストの手が途中で止まる。

微かに見える胸の膨らみで、この呪われた人間が女だと分かった。まだ若いのだろうか。所々に白い元の肌が覗いている。

ファウストはアレクに湯を持って くるように言いつけると自室に戻り、着替えと薬を取って来た。

アレクはファウストを手伝いながら、この人も自分と同じなのだと分かった。

彼女は呪われていた。見ただけでそれと分かる呪いはとても珍しいものだと、これまでの経験からアレクは知っていた。大抵の呪いは、かけられた当人にしか分からないものだ。そして、その解き方も呪った魔法使いと、呪われた本人だけが知っている。

アレクも、自分かけられた呪いの解き方は知っていた。だが、それは今の自分にはとても難しいことだった。

彼女は、いったい、どんな呪いをかけられたのだろう。

アレクは、自分よりも過酷な呪いをかけられた少女を目の当りにして、彼女を哀れに思った。

3 東の果ての森

リアは、温かな陽だまりのような匂いに包まれて目を覚ました。

柔らかな布団に包まれて目覚めるのは、随分と久し振りのことだった。きっと、ここは天国なのだろう。父と母の元に自分は帰ってきたのだろうか。そんなことを考えていると、視界の中に鮮やかな赤い色が飛び込んできた。

「気が付いたね。良かった。このまま目を覚まさなかったらどうしようかと思っていたんだ」

そこは見慣れぬ天井の小部屋だった。そして自分がくるまっているのがふかふかの夜具だと知って驚き、辺りを見回すとそこは、石壁は清潔に磨かれていて、埃や蜘蛛の巣なんてなくて、近くの窓からは柔らかな日差しが差し込んでいた。

柔らかな乾いた布団はとても軽く、香草の爽やかな匂いがした。こんな布団で眠ったのは随分と久し振りのことだった。そして、その時になって自分の服が別のものになっているのに気がついて狼狽える。

もう何日も着替えていなかった上に、森の中でしばらく過ごしたせいで随分と汚れていたはずだった。誰がしたのかは分からなかったが、あまり愉快ではないその作業を思うと申し訳なく思う。瘡で覆われた醜い身体を見られたことよりも、あの汚い衣服の始末を他人がしたことの方が恥ずかしかった。

ここはあの魔法使いの家なのだろうか。だが、そう思っても不思議と怖くなかったのは、その少年のせいかもしれない。

少年は魔法使いには見えなかったし、リアがベッドに起き上がっているのを見て、嬉しそうに駆け寄ってくる姿は胸に温かいものを運んでくれるようだった。

「起きられる？」

少年がにっこりと屈託なく笑った。そして、何も言えずに戸惑うリアを見て慌てて言う。

「土で汚れていたから勝手に着替えさせてしまったけれど、何もしてないから安心して。…大変だったね」

その最後の言葉はリアの瘡のことを気遣っての言葉なのだろう。けれど、その言葉の中に厭な刺は感じず、寧ろ、その気遣いがリアは嬉しかった。

「あ、りがとう…」

少年の言葉に素直に感謝の言葉が出てきて、リアは少しだけ気が楽になった。

何も言わなくてもいいよ、という風に少年は笑い、そして、普通の病人に接するようにあれこれと世話を焼き始める。

「何か食べられる？ それとも水の方がいいのかな。あ、それより、起きられるなら向こうに行こう。それ、気になるならこれを使うといいよ。前のよりも軽くて楽だと思う」

少年はくるくるとよく動き、そして、よく喋った。リアの身仕度を手伝い、その小さな手を貸してくれた。

年の頃なら六才か七才くらいだろうか。それにしてはしっかりとしていたし、よく気がつく。リアに何が必要なのか分かっていて、よくしてくれる。

醜い瘡を微塵も恐れることのない態度にもほっとする。

ベッドのすぐ脇の手の届く所に置かれた杖を取り、リアはゆっくりとベッドから出る。リアの寝ていた部屋から続くドアの向こうにも小部屋があり、そこは少年のものらしかった。そして、そこを抜けると昨日外から覗いた居間があった。

三つに増えた椅子の一つを勧められて、リアはゆっくりとそれに腰を下ろしていた。強張っていたはずの関節が今は少しだけ楽だった。

「僕は、アレク。ここはファウストっていう魔法使いの家なんだけど、昨日越してきたばかりでこの辺のことはあまり知らないんだ」

木のカップに水を汲んでリアの前に置くと、少年はそう自己紹介をした。

「行く当てがないのなら、しばらくここにいたらいいよ」

返答に困るリアを見て、アレクと名乗った少年が続ける。

「魔法使いが怖い？でも大丈夫。僕がちゃんと守るし、ファウストはそんなに非道なことはしないから」

「でも、私にはここに置いて貰う理由がないもの」

「そんな身体でこれからどうするの？君が困っているの是一目で分かるし、まだ元気にもなっていない。出て行くの

はそれからでも遅くないでしょ」

リアはアレクの優しい言葉に涙が零れた。父が死んだ時に全部流れてしまったと思っていたのに、まだこんなにも残っていたことが不思議だった。

「名前は？」

アレクはリアの返事を待たずにそう問いかけてきた。

そして、リアは小さく自分の名を呟いていた。

三日後、リアは父の墓まで歩けるくらいに回復していた。

死を覚悟していたはずなのに思いがけず助けられて、僅かな猶予が与えられただけにすぎなかったが、それでも今生きていることがリアには奇跡のように思えた。

土を盛っただけの父の墓が、森の動物たちに荒らされていないはずと気になっていたのだが、以前よりもうまく歩けなくなった足は、思うように動いてはくれなかった。

アレクの手を借りてゆっくりと歩きながら、リアは醜い瘡を隠すように被ったショールを握り締めていた。

森の外に出るのは怖かった。けれど父の墓は森の外れの、ちょうど荒地と森の境あたりにあった。

そこは、村人たちが父の亡骸を捨てていった場所でもある。

森と村の間には小さな丘があって、ごろごろとした大きな石が転がる荒地が広がり、森に入ろうとするものの意思を挫こうとしているみたいだった。そして、森に入れば大木の奇妙に振れた幹が不気味に影を落とす様子が、村人たちがこの森を恐れる理由にもなっていた。見たこともない獣が数多く棲息し、それらの獣たちは人を喰うとも噂され、この森に近づく者は滅多にいない。

リアだって父の亡骸がこんな場所に捨てられなければ近づきたいとは思わなかったし、あの家を見つけることもなかった。

今となってはそれが良かったのかどうなのか分からない。けれど、リアのことを心配し傍らを歩くアレクの赤い髪が目に入ると、優しい気持ちになれるから不思議だった。

「まだ遠いの？」

それはリアを気遣っての言葉だった。

アレクに少しも疲れは見えなかったし、その足取りも軽い。時折止まりそうになるリアの歩みを注意深く見守りながら、それでもアレクは急かすことはなかった。その気遣いがリアには嬉しかった。

「もう少しだと思うんだけど」

リアは曖昧に答えながらも、その場所のことはよく覚えていた。

森と荒地の境には少しだけ開けた草地があって、その側の丘には大きな樫の木が見えた。

冬枯れた立ち木の細い枝が白い空に広がり、見覚えのある景色が流れた。

芽吹いたばかりの下草を踏んで森の中に再び入ると、似通った大木の並ぶ森の中は暗く静かで、日の光は殆ど差し込まなかったが、父の墓のある場所だけ柔らかな光の柱が立っていた。

しばらく進むと、同じような大木の一本の根元に新しく盛られた土が見える。その上には小さな石が積まれて小山のようになっていた。

「父さん…、」

リアは小さく呟いて、その前に膝を付く。

「私、まだ生きてるよ。この人が助けてくれたの。私、頑張るから…」

祈りを捧げるリアの肩にそっとアレクは小さな手を置いた。何と言って声をかけたらいいか分からなかったし、何も言うべきではないような気がした。その身の上は少しは聞いていたが、実際にその墓を前にしたら、リアの不幸な境遇が自分のことのように胸が痛くなる。

しばらく黙祷を捧げたリアは、盛り土の側に座ると愛惜しむように大地を撫でて、そして歌い始めた。

優しく流れる歌声は、その醜い姿からは想像も出来ないほど美しく心に響いた。

感謝と、贖罪と、寂しさと、悲しみと、愛しさと、信じられないくらいに沢山の思いがその声から伝わってくるのが不思議だった。そして、アレクはその場にすんと腰が抜けたみたいに座り込んでいた。

その澄んだ歌声は大気を震わせ、この世の全てのものの中に染みていくようだった。

それは、彼女の心そのままに歌となって溢れ出てくるのか、彼女の悲しみが深すぎて周囲の森の木々までもと一緒に木霊し合唱しているようにも聞こえた。

空も、土も、木も、石も、風も、全てが彼女の歌に揺らいでいる。その思いの全てを受入れ慰撫するように、彼女に触れては弾けて解けた。

様々な色の光の乱舞に包まれながら、リアはひたすらに歌った。そして、彼女是最愛の父に捧げる鎮魂歌を歌い終わると、小さな溜め息を一つ吐いた。

夢見心地の一時は瞬く間に現実に戻り、森の慟哭も鎮まる。だが、アレクはその歌が終わってもまだ夢の中にいるような気分だった。ふわふわとした気分のままで、土の柔らかな感触が愛しく思える程だった。

こんな歌を今まで聞いたことがなかった。

「まだ、歌える…。大丈夫よ。父さん」

リアは盛り土を見つめながら呟いた。それはまるで自分自身に言い聞かせているようにも聞こえた。そして、傍らに座り込むアレクを見る。

「ありがとう、アレク。…私、ずっと歌えなかったの。父さんが死んで、私もすぐに死ぬんだと思ってた。父さんのために歌ってあげたいのに歌えなくて辛かった。でも、やっと歌うことが出来たわ」

顔の大半を固い瘡に覆われてその表情は判然としないけれど、きっと彼女は笑っているのだろうとアレクは思った。

「あんなに凄い歌、聞いたの初めてだ」

アレクはどんな言葉でも彼女の歌の素晴らしさは現せない気がして、言葉を知らない自分をもどかしく感じた。リアは少し首を傾げ、そして、ありがとうと言う。

「私、南西の都のテファという町から来たの。父さんはそこで仕立屋をしていて、沢山のお針子を雇って王宮の召使いたちの服を作っていたわ。時々町の人達の晴れ着とかも引き受けて、私もお針子たちと一緒に服を作っていた。仕事をしながら毎日のように歌ってたわ」

似たような石造りの建物の並ぶ町の中、その一つがリアの家だった。中庭を挟んでその一画が仕事場になっていて、同じ年頃の娘たちと一緒に針を動かしながら、町の噂話に耳を傾けたり、綺麗な晴れ着を縫いながらどんな人がこれを着るのだろうと想像したりして、毎日がとても楽しかった。

リアの歌声は町でも評判で、道行く人が足を止めて耳を傾けることもしばしばだった。その内の何人かは、リアに劇場で歌わないかと誘ったが、内気なリアはその全てを断ってきた。見知った人ばかりの中で、心のままに歌えればそれで良かったし、お針子の仕事も嫌いではない。

「歌うことは好きだったけれど家を離れるのがとても怖かったの。周りの人達はみんな優しくかったけれど、お針子たちの話に出てくる町の人達は意地悪で冷たい感じのする人もいて、きっと、そんな人達に会うのが厭だったのだと思う。私は父さんと母さんに守られて暖かな家は居心地が良かったから、そこから出ていきたくなかったんだわ。年頃になって店を訪ねてくる男の人達からいろんな贈り物を貰うようになって、でも、私はそんな人達でさえ怖くて、二人きりにされると口を利くことも出来なかった」

臆病で、家の中のことしか知らない無知な自分が、今はとても可笑しいと思う。

滑稽で無様な小娘の姿が、鼻につくとお針子達に言われてるなんて思いもしなかった。何も知らない顔をして男たちをたぶらかしてる酷い女だと、影で囁く声が聞こえたとき、リアは人間がとても怖くなった。

リア自身考えもしなかったことを誠しやかに噂し合い、そして蔑みの目で見ると、それまで友達だと思っていた人達が、ある日突然見知らぬ人に豹変する。彼女達にしてみればただの軽い悪戯だったり冗談だったりするのかもしれないが、元々内気だったリアにはそれを怒ることも笑い飛ばすことも出来なかった。

それ以来部屋に籠るようになり、両親以外の人間を避ける日が続いた。

窓辺に集う小鳥たちにパン屑をやりながら、小さな声で歌うと、小鳥たちはダリアを慰めるように囁く。けれどダリアは以前のように歌えなくなっていた。

そしてある日、その魔法使いはリアの部屋の窓の外に現れた。

「黒い髪に黒い瞳で、黒い外套。全てが黒く染められている中で、肌の色だけが柔らかなクリーム色をしていて、脅える私をその魔法使いは哀れむように見たわ」

あの恐ろしい魔法使いの姿が今でもはっきりと思い出せる。

身体が自然と震え出し、そんなリアをアレクの小さな手がふわりと包み込む。

「もういいよ。何も言わなくて」

リアは、あの頃からちっともかわっていない自分を責め続けていた。守られることばかりで、自分一人の力で何かをしようとする莫迦な子供の自分のせいで父も母も死んでしまったのだと思った。

初めからあの魔法使いの言う通りにしていれば、少なくとも両親は死なずに済んだのかもしれないのに。そう思うと余計に自分が許せなかった。

リアは顔を両手で覆い、嗚咽するように身体を震わせた。

「また歌ってよ」

アレクは慰めの代わりに歌をねだった。

彼女の悲しみが分かるから、慰める言葉を見つけられない。呪いはその本人だけでなく、周囲の人間まで不幸にしまうことをアレクもよく知っていた。そして、魔法使いだけが悪いのでもないことも知っていたが、今はそれを言っても何の慰めにもならない。

魔法使いは自分の意思で人間を呪ったりはしない。そこには必ず妬んだり憎んだりする人間がいて、魔法使いたちはその人間の依頼で動く。彼女が誰かに憎まれていたなんて認めたくはなかったが、逆恨みや嫉妬までは本人に責任はない。だから理不尽な呪いが横行するのだが、呪われた方はたまったものではない。

魔法使いを忌み嫌う癖に、それを利用する人間の方がずっと魔法使いよりも恐ろしい生き物なのだと、この何年かで悟ってしまったアレクは、リアの苦悩を思うと胸が痛んだ。

自分に至っては何の理由も見当たらず、十年もこのまま迷っている有様だった。だが、それをここで口にするには出来なかった。

ファウストはすぐに自分が呪われていることを看破ったのだが、だからといって何かをしてくれる気配もないし、アレクも自分の呪いのことは自ら口にするにはなかった。

だが、リアにかけられた呪いはそれまで見たこともないもので、酷く醜悪で邪悪な気配がした。

アレクは、一週間ぶりに戻ったファウストにリアの呪いのことを尋ねていた。見ただけで呪われていると分かる呪いは珍しく、彼女に何があったのか知りたいと思った。

「人間が人間を呪う。それは知っていますね。魔法使いは呪う人間の望む結果を導く為の道を作るだけなのです。それを決めるのは人間です。最期の一線を越えてしまう人間は、やはりもう人の法から外れたこととなりますが、それを自覚している者はほとんどいません。呪いたいと願う人間がいて、呪われる人間がいる。魔法使いは自ら人を呪うことはしない。それは我らが人の法から外れた人間だからです。魔物の法に従った時からそれはもう変えられない。そして、人を呪った時から人は人でなくなる」

「呪われた人間は？どうなるのです？」

「彼らは人です。人の法に守られた人間ですから、人の法に因って呪いは解ける。呪いを解く方法は、あなたも知っていますね。魔法使いは呪いをかける時にその法を呪われた人間に必ず教えます。それが人を呪う時の法なのです」

確かにアレクは自分の呪いを解く方法を知っていた。けれど、それを誰か他の人に話してはならない事もその時に教えられる。

「彼女も、誰かに恨まれて呪われたのでしょうか」

「そうですね。人とは勝手な生き物です。自分よりも美人だったからだとか、自分よりも幸せそうに見えるからだとか、自分にとって邪魔な存在だと思えば、簡単に呪う」

「そうですね。でも、それだけじゃない」

「確かに、良き人間もいます。だから、呪いを解くこともできる」

「彼女の呪いも解けるんですか」

「それは、彼女次第です」

そう、全ては自分次第なのだ。呪われた人間なら、誰でもそのことを知っていた。解き方は彼女自身が知っているはずだった。それを他言することは出来ない。何故なら、他言したその瞬間、その呪いは完全に解けなくなってしまうのだ。自分自身の言葉がその呪いを完成させてしまう。それは、自分が呪われた時に、呪いをかけた魔法使いが解き方

を教えると同時にかける呪いだっただ。

1 魔法使いの家

日だまりの中、温かなショールを纏ったリアはアレクが用意してくれた揺り椅子に揺られながら歌を歌っていた。その足下には森の中の小動物たちが集い、彼女の周囲には優しい時間が流れる。

随分と歌っていなかったのに、歌はリアの中にちゃんとあって、アレクにせがまれるままにリアは歌い始めたのだった。

今のリアに出来ることと言ったら歌うことくらいしかなかった。

不自由な手足ではアレクの手伝いなど出来そうになかったし、それどころか足手まといになってしまう。

この家の魔法使いには二度会っただけで、リアは話したこともない。魔法使いはほとんど家にはおらず、いつもどこかに出かけて行く。

そして、アレクは、リアをお姫様か何かのように世話を焼く。リアにはそれが苦しくてならなかった。

家の中の掃除も食事の支度も全て小さな少年一人の手に任されていて、アレクの方も不平一つ言わずにそれらを手際よくこなすのだ。その日も、仕事を終えてリアの元へとやってきたアレクに、リアはつぶやく。

「私も何か手伝えるといいのにね」

「これは、いいんだ。僕が勝手にやっていることだし。彼は一度も僕に何かをやれとは言わないんだけどね」

「どうして？」

「僕のやっていることなんて彼の魔法なら一瞬で片付いてしまうようなことばかりなんだけどね。でも僕は人間だから、魔法をあてにはしないようにしないと。それに、魔法使いたちだって全部が全部魔法に頼りきっているわけじゃない」

「そうなの？」

「自分の都合のいいように物事を振り曲げてばかりだと、いつかその振れが自分に反ってくるらしいよ。どんな世界にも理があって、仮に世間からはみ出してしまったとしても、そこにも理は存在している。だから、理を曲げないように規律が必要なんだと思う。僕がしていることもそれと同じで、自分の力で出来ることをやってるだけ」

特別なことではないんだとアレクは笑うけれど、リアにはとても立派に見えた。

自分を甘やかすことは簡単なのに、それをしない。ただの意地っ張りなのかもしれないけれど、リアもずっとそう思って生きてきた。その思いは同じだった。そして、今のリアにはしたいことも出来ることもない。

「でも、私には出来ることがないのかわ」

リアの呟きにアレクが膝に縋る。

「そんなことはない。君の歌は素敵だし、君が歌うと僕は幸せな気分になる。いつもの単調な仕事だって楽しくなる。君が気付かないだけで、君は沢山のことをしているんだ」

自分を見上げるアレクの真摯な眼差しに、リアは苦しげに目を逸らした。

そんなリアの膝元にアレクは甘えるように寄り添った。

「人は、生きてるだけで何かを成してる。僕はそう思う。誰一人としていなくていい人間なんていないよ」

「どうしてそんなことが言えるの？ 私は自分をこんなふうにした魔法使いを許すことはできないわ」

「魔法使いには魔法使いの掟というか、規律というものがあると聞いたことがある。自分の為に力を乱用したり、呪いを曲げたり、理を無視したりすると使い魔たちはその魔法使いを主とは認めない。魔力に頼りすぎたり、使い魔に裏切られたりすると狂気に蝕まれ、狂った魔法使いは自滅するか、他の魔法使いに排除されるんだって。自由に見えて自由ではない。孤独に見えても真の孤独ではない。彼らには彼らの世界があって、そこから永遠に自由になることはない。それって人の世界と大差ないと思わない？」

大人びたアレクの口振りにリアは気後れする自分を見つけて戸惑う。

「どうしてアレクはそんなことを知っているの？」

「いろんな魔法使いに会ったからね。今の魔法使いで五人目」

「五人も？」

リアはまだ幼く見える少年をまじまじと見る。リアも魔法使いを捜して旅をしたが、二人だけしか見つからなかった。しかも彼らはリアの呪いをどうすることも出来なかった上に、法外な報酬を要求してきた。

「性格とかは皆違うのに、共通していることが一つだけあるんだ。彼らはとても人間を憎んでいるということ。だから

、人間のくだらない恨みを聞き、容易く呪いをかける」

「悪いのは魔法使いだけではないのは分かってるわ。本当に悪いのは自分なのだと…。人に恨まれるような人間だから呪われて当然だと言う人もいた。何が悪いのかなんて分からない。けど…」

リアは自分でもどうしたらいいのか分からなくて、声が震えた。

「でも、リアはまだ生きてる。僕はリアがここに居てくれて嬉しいし、君が悪いのだとも思わない。これからの時間、ここで暮らすのが厭なら仕方がないけれど、もしも、君が望むならずっとここにいればいい」

「でも私はもう…」

リアはその先を続けられず、ただ漠然とした予感が辺りをもの悲しく包み込む。

日が西に傾き、日差しが弱まる。

アレクは静かに目を閉じたリアを手伝って家に戻った。

二人とも、その時がそんなに永く続くものだとは思わなかった。ただ、その時がくるのが少しでも遅ければいいのに、と思っただけだった。

春の日差しはまだ浅く、日が陰ると急に冷えてくる。炉に火を起こしお茶の支度をしながらアレクは、老婆のように身を屈めて椅子に座るリアを見つめる。

彼女の身に何が起こったのか、とても気になったが、それを尋ねることは出来なかった。彼女の瘡は病のせいではなく、呪いなのは明らかだった。

魔法使いは人間など好きではないのだ。

それは揺るぎのない事実だった。そして、そんな彼らが自分たちを無償で助けてくれるはずもないことも、アレクは知っていた。

2 魔法使いの家

その夜、リアは眠れずに何度も寝返りをうつ。温かなベッドは優しく身体を包んでくれるのに、今はその優しさが心に痛い。

迷わずに、自分の心を守らなければと思うのに、アレクの優しさはリアを弱くするようだった。

他人に優しくされることなどもう無いとばかり思っていたのに、こんな自分にも手を差し延べてくれる人がいる。それはとても嬉しいことのはずなのに、何も返せない自分を見つけた時、それは重荷になる。

暗い天井に微かな光が差し込む。

月が上ったのだろう。白い頼りない光は、昼の太陽と違って氷のように冷たい感触だった。

リアは再び寝返りをうち目を閉じようとしたが、窓の外に何かの気配を感じる。揺れた大木の影が恐ろしい怪物のように並ぶ森が笑いさざめいたような気がした。

誰かが歩く物音は、密かに、だがどこか苛立たしげに聞こえる。

リアはそっと窓の側まで身を乗り出し、月明かりの庭を覗く。

そこには、あの魔法使いがいた。

月の光の中を行ったり来たり、何かをぶつぶつと呟いているが、どこか異国の言葉なのか、ダリアには何を言っているのかさっぱり分からなかった。

魔法使いの金色の髪は今は月の色に輝いて、その背に豊かに波打っていた。黒の外套を羽織ったその姿は、普通の華麗な装いとは趣を異にして、禍が禍がしく妖しい。

これが彼の本来の姿なのだろうか。

リアがそう思った時、魔法使いがリアをじっと見つめた。

深いブルーの色が今は紫に光を弾くその瞳にじっと見つめられて、リアは動けなくなる。

月明かりの中に入らないように影から様子を窺っていたリアだったが、その姿がはっきりと見えているような魔法使いの視線に急に恐ろしくなる。

リアのその脅えが伝わったのか、魔法使いは微かに笑みを浮かべ、そして、次の瞬間に窓のすぐ外にいた。

音もなく窓は開き、そしてふわりと甘い香りが部屋の中に流れ込んできた。

それでも魔法使いから目を逸らすことの来ないリアは、音もなく近づいてくるその影に覆われて、闇に包まれる。

甘い香りの中にどこかぴりりとした香辛料の香りを嗅いで、意識がはっきりとしてくると、リアは魔法使いの腕の中にいることに気がついた。

辺りを見回すとそこは一面の闇で、微かに森の輪郭が黒く浮かんでいる。夜風が口許を撫でていく冷たさに、ようやく自分が空に浮かんでいるのだと気がつく。

「眠れぬのなら少し付き合ってくれないか」

耳元で囁かれて、リアは思わず魔法使いにしがみついていた。

抱き上げられた恰好のまま不安定な空中にることが信じられず、とても恐ろしかった。

「そんなに脅えなくても捕って喰いはしない」

笑いを含んだ囁きが再びして、リアは魔法使いの顔を初めて見た。

遠目から見ても美しい容貌だったが、こうして間近にするとその美しさは他を圧倒する。形のよい唇にはからかうような笑みが浮かび、長い睫の奥の涼しげな瞳が今はリアを見つめている。そして、その瞳の中にリアは自分の醜い姿を見た。

リアは魔法使いから目を逸らし、目を閉じた。

「降ろして…」

それだけ言うのがやっとだった。

リアはまだ十七の娘だった。

自分が醜いことを自覚してはいたが、美しい魔法使いに間近で見つめられるのはたまらなく苦痛だった。自分の姿が人に不快を与えるものだ知っているから、余計に惨めで苦しくてならない。

それなのに魔法使いはそんなリアの醜い瘡の出来た手をそっと握る。

「周りを見てごらん。こんなに星たちがざわめいて君を歓迎しているのに」

リアはその言葉に促されて、怖々と目を開けた。

リアは星たちの中心にいた。見渡す限り、粉砂糖のような星の光が暗い夜空を飾っていた。普段なら見えないようなとても小さな星の光まで、それは夢のような風景だった。

息を飲むその音さえ夜の暗闇に吸い込まれていくような気がした。

「きれい…」

リアの眩きに、魔法使いは満足気に笑むと更に上空へと舞い上がった。

上ったばかりの月が自分の足下よりも低く、自分を見上げるように輝くのが不思議だった。闇の中に、山々の稜線が更に暗い色をして浮かび、天と地の境は今とはとても近く見えた。そして、高天山が雲の上にその姿を現し月に銀色に輝く。

解けることのない氷と雪で覆われた白い峰は神々の住まう地なのだと言い伝えられていた。そこへ行ける人間は一人もいなくて、そこがどんな場所なのか誰も知らない。だから神々の住まう天上なのだと言う。

心と下を見ると、そこには深い闇が広がり、地面がなくなっていた。見えなくなるくらい高い所まで来たということなのか、それでも高天山はまだ遠い。

「あの峰に今は神はいない。あそこにあるのは廃墟ばかりだ。神の叡知を欲する者には宝の山ではあるが、それはこの世の滅びを意味する」

魔法使いはその未来が見えるとでもいうのか、険しい中に寂しさを漂わせて山を遠く見た。

「この世はうつろいやすく、常に同じではありません。それなのに人間だけは変わらない。まるで神々に呪われでもしているように…」

独り言のように呟いたその言葉は、リアには難しく、そして身の竦む思いがした。神に呪われているなんて恐ろしいことを、この魔法使いはいつも考えているのだろうか。

「我らは皆運命に縛られてその道を辿る。こうして出会えたことも、それぞれに意味はあるのでしょうか。アレクに出会ったことも、こうして今、私が君と過ごしているのも」

顔を寄せて囁くその声はそれまでとは違い、甘い響きが加わっていた。

「もしも厭でなかったら、私にも歌を歌ってくれませんか。アレクにばかり、不公平だと思わないですか？」

きらきらとした瞳が少年のようでもあり、リアはその声にドキドキしながら、少しだけなら、と思い始めていた。この一週間、自分はその家で過ごし、こんなにも穏やかな日々を送ることができたのは、二人のお陰だった。そして、今の自分に出来ることは歌うことくらいしかない。

魔法使いはリアを促すように優しく見つめ、そして、リアはその瞳に誘われるように唇を開いた。

だが、リアは歌えなかった。

歌おうという意思はあるのに、何か喉の奥にもものが詰まってしまったかのように、その声さえも出せなかった。それまで普通に喋っていたはずなのに。

必死に声を出そうとするリアだったが、どうしても歌うことが出来ない。

魔法使いはそんなリアをそっと抱きしめ、「無理せずともよい」とだけ言う。

リアは、自分でもどうして歌えないのか分からなかった。

歌いたいと思うのに声がない。それは初めてのことで、呪いをかけられた時よりも悲しく恐ろしかった。

歌はリアの唯一の希望だった。それが一瞬にして絶たれ全てが闇に閉ざされてしまったような、そんな気がした。

醜く重い瘡を被っていることも辛かったけれど、それでも生きてこられたのは歌があったからだ。自分の歌は父と母を慰めることができ、今はアレクを楽しませていたのに。

他に何も出来ない自分のたった一つの拠り所でもあった歌を失ってしまった今は、自分の存在そのものが空虚なものに思えた。

そして、そんな自分に何が残っているのだろうと考える。

魔法使いは打ちひしがれたリアに謝罪し、ベッドに戻してくれたが、その夜リアに眠りが訪れることはなかった。

3 魔法使いの家

その日は久し振りに朝から雨が降っていた。種蒔き前のこの時期の雨は大地を潤す恵みの雨だったが、アレクは不機嫌に空を睨む。

今日はリアの歌が聞けない。具合がよくないと言ってベッドから出てこないのは、多分この雨のせいなのだと、そう思った。

それとも昨夜の外出のせいなのだろうか。昨夜遅くにリアをファウストが連れ出したことは知っていた。リアは自由に動けないから、ファウストが彼女を無理やりに連れ出したのは分かっていたけれど、今まで見向きもしなかったのに、何故今になって彼女に近づいたのか。

女たらしな魔法使いのことだから、きっと碌な理由でないのは分かるが、どちらにしてもアレクには面白くないことに違いはない。

その翌日もまたリアはベッドから出ようとはしなかった。そして、珍しくファウストも外出せずに家にいた。

呪いをかけられた娘まで誘惑する鬼畜のような人だとは思いたくなかったが、彼の微笑はその気がなくても十分に魅力的なのだ。

リアは魔法使いを嫌悪しているから簡単には彼の誘いにはのらないだろう。けれど、彼は特別なのだ。人間にそれと悟られぬように魔法を使うのは当然のこととして、それ以外にも相手がどうすれば喜ぶのかを知っていて、言葉巧みに恋を仕掛ける。

娘たちが魔法使いに誘惑され、その恋心を奪われるのはいつものことで、そんな彼女たちに同情はするが、こんなに焦りを覚えたのは初めてのことだった。

リアは、アレクにとって特別な人だった。

七才のまま大人になれないアレクはいつも子供扱いされて、一人の人間として見て貰えなかった。当然、アレクのことを頼るような人間はいなかったし、ファウストが側にいるのでは恋など論外だった。全ての女性はファウストに目を奪われアレクに気が付きもしない。

呪いがかけられてから既に十年以上が経つ。時は残酷に刻まれ続け、実年齢との差が広がるにつれてそのギャップは激しくなる。

いつまでも小さなその手を心の奥底で憎みながら、それでもいつかは戻れると信じていなければ生きてなどいられない。

見た目ですぐに呪われていると知れる方がどれほど良かったかと思う。この苦悩と苦痛は自分だけのもので、誰一人として理解するものはなく、言い様の無い無力感に苛まれる。いつまでたっても大人になれない子供など、寓話の中ではもてはやされても、現実では惨めなだけだった。

けれど、リアは違った。

自分を一人の人間として認め、そして不自由なその身の世話をアレクに許してくれる。譬えそれが呪いの所為だったとしても、それでもアレクにとっては彼女に頼られるのは嬉しいことだった。子供だと馬鹿にされ相手にもされない現実アレクを傷つけたが、今はリアがいた。

アレクは日課の雑用を大雑把に片付けてしまうと、リアの元へと向かった。

昨日から食欲がないと言って何も食べようとしないのも気になったし、リアの声が少しでも聞きたい。

小さな木の盆に水を乗せて運びながら、リアの元に向かうアレクの足取りは軽かった。

4 魔法使いの家

リアはあの夜以来、ずっと眠れずにいた。ベッドの中にも眠りは訪れず、ただ淡々と時は過ぎて、いつの間にかまた朝を迎えていた。

心なしか瘡もまた大きくなったようだった。顔を全て覆い尽くすかのようにせり上がり、背中も酷く痛んだ。

自分にはもう何もないのだと、そう思う度にこの瘡は大きくなるようだった。だが、そんなリアの憂鬱を払うようにアレクが部屋に入ってくると何故か薄暗い部屋に火が灯ったようになる。

彼の赤い髪は鮮やかにダリアの視界を彩り、いつもなら重苦しい気鬱を晴らしてくれるのだが、今日はそれが眩しくて見つめることが出来なかった。

「起きられない？」

アレクが心配そうに尋ねてくるが、リアは首を小さく振っていた。

歌えなくなった自分にもう生きる意味はないのだと、そう思った。

アレクは手にしていた木の盆を側の小机の上にそっと乗せると、ベッドの方へと身を乗り出してリアの顔を見る。

「辛いのは分かるけれど、少しでも食べないと」

言いながら、リアの瘡が一層酷くなったことに気がついて、アレクは息を飲む。

「こんなに酷くなってるなんて気がつかなくて、ごめん」

アレクの小さな手がそっと顔の瘡を撫でた。その手は日々の雑用の所為なのか、酷く荒れていた。けれど、リアはその手の温もりが固い瘡を通して直に伝わってくるような気がして、身の内に温かいものを感じた。

自分よりも年下の男の子なのに、時々とても大人びて見えるアレクにリアは何度慰められただろう。

リアは思い頭をゆっくりと動かし、いつもの倍の時間をかけて起き上がる。自分を心配し、この痛みを悲しんでくれる人が一人でもいるのなら、このまま諦めることは出来ないと思った。このままベッドの中にも具合が良くなるわけでもなかったし、自分に甘えていたら本当に動けなくなってしまう。

アレクは、そんなリアに無理はしないでと言ったが、リアは何とか自力で起き上がった。水を一口貰い、そして、杖を手にもってベッドから出ると少し目眩がした。

しばらくして目を開けると、すぐ近くにアレクの顔があった。緑の瞳が小さく揺れて、リアの様子をじっと窺っているようだった。

そんなアレクを見てリアは、まるでアレクに合わせるように自分の腰が曲がったみたいだと、そんな、とりとめもないことを思う。以前にも増して狭まった視界の中で唯一、明瞭と見えるのがアレクだった。杖をついた自分の目線とちょうど彼の身長が同じくらいで、これ以上顔を上げられないリアにも無理なく彼の顔を見ることが出来た。

アレクの手を借りて居間に移ったリアは、用意された自分の席に腰を下ろす。

アレクはスープを温めるために竈に向かい、リアは少し痛む背中を丸めるように床を見ていた。

そこには魔法使いがいたのだが、リアは気がつかなかった。そして、ファウストも彼女に声をかけることはせず、いつものように書物に目を落としている。

アレクの手を借りてスープを二口三口飲み下したリアだったが、それ以上食欲は湧かず首を横に振る。

アレクはそんなリアに一言も文句は言わず、スープを片付けてしまうと、リアの膝元へ寄り添う。

リアはアレクが心細そうに擦り寄るのを見て、彼の赤い髪をそっと撫でた。

心のままに歌声が唇から零れ落ちた時、リアはアレクを愛しいと思った。

以前に比べれば拙いほどの頼りない歌声ではあったが、歌はまだリアの中にあった。

小さな子守歌は、リアが幼い頃に母がよく歌っていた歌だった。

アレクはリアの手を握り、そしてその醜い灰色の瘡に口吻をする。

自分を見上げるアレクの緑の瞳と目が合うと、リアはまた別の歌を歌い始める。

魔法使いに頼まれても歌えなかったことが嘘のように、歌は自然に自分の中から溢れてきてリアは幸福だった。

あと僅かしか生きられないのなら、どうかこのまま歌が消えないようにと、それだけを願う。

もうあんな思いをするのはいやだった。

もしも叶うならこのまま死にたいとも思う。けれど、あの言い様のない絶望の中に灯を点してくれたのはアレクだった。そのアレクに、こんなふうに縋られて、リアは切ない思いで胸が一杯になる。

歌が途切れ、辺りに哀惜の余韻が漂う中、いつの間にか書物を閉じたファウストが拍手を送る。

リアはその音にびくっと震えた。

アレク以外に誰かがここにいるとは思ひもしなかったリアは、幸福だった時間が瞬く間に凍りついたような気がした

。

そんなリアを見て、アレクが怪訝そうな顔をする。

「目が見えないの？」

ファウストのような目立つ人が目に入らない訳がないのに、これまで気がついていなかったということは、アレクにはそれ以外に考えられなかった。

アレクは身を乗り出してリアの顔を覗き込んでいた。

リアは大丈夫だからと小さく呟くが、その声はアレクの杞憂を確信に変えただけだった。

「何も見えない訳じゃないの。アレクの髪の色はとても綺麗だわ。それに、私はまだ歌えるから…」

大丈夫、そう言おうとした時、魔法使いが口を開く。

「素敵な歌声のカナリアですね。人の心を虜にする魔力を秘めた歌声です」

リアはその声に身を堅くして、そしてアレクは魔法使いを見る。

「この前は聴かせて貰えめせんでしたが、アレクのためになら歌えるのですね」

魔法使いは静かに席を立つ。

アレクはリアを庇うようにして前に立つと、静かに言う。

「リアの心は駄目だよ」

魔法使いはアレクをじっと見つめ、そして微かに笑い、「分かっています」と言って、そのまま自室に籠ってしまった

。

5 魔法使いの家

それから三日が経ち、リアは本当に動けなくなっていた。

この家でアレクたちと暮らし始めてひと月が過ぎていた。

リアの様子を心配して、アレクはずっと付ききりだった。けれど、リアはとても静かだった。

死ぬことは決して怖くはなくて、寧ろ父や母の元に逝けるのだと思うと嬉しくさえあった。でも、今まで親身になって面倒を見てくれたアレクのことを思うと、彼との別れを惜しむ自分がある。

そして、リアは掠れた声でアレクに言う。

「私が死んだら父さんの墓の側に埋めてくれる？ 本当は、自分の足で行くつもりだったのだけれど、もう、それも出来ないみたい…」

アレクは、じっと自分の手を見つめ、その言葉を頑なに拒むように唇を噛み締める。

リアはそんなアレクに、最後に何が出来るのか必死に考えていたことを言う。

「私にはもう、アレクが大きくなった姿を見ることは出来ないけれど、きっとあなたはあの魔法使いよりも素敵な青年になっていると思うわ」

魅力的な魔法使いに少しはときめいたリアだったが、やっぱりアレクの方が気懸かりなのは変わらない。自分よりもしっかりしている少年には、そんなことはどうでもいいのかもしれないが、それでも、ファウストとのやり取りを見ていれば、アレクが魔法使いに敵愾心を燃やしているのは明白だった。

「私がまた歌を歌えたのはアレクのお陰よ。アレクには感謝してるの。本当に、心から、ありがとう」

そして、リアはその続きを飲み込む。

魔法使いが最後に呟いた一言で、リアは自分の気持ちに気付いてしまった。

アレクの為になら歌える…。

彼の優しさに触れてまた歌を取り戻せたのは事実で、魔法使いに言われるまで気付かなかったなんて、なんて滑稽なんだろう。ずっと彼の側で歌っていたいのに、こんなになってから気が付くなんて、つくづく自分は愚かなのだと思った。そして、だからこそこの思いは告げられないとも思う。

自分の半分ほどの年の少年に恋をして、その上、もう命の火は燃え尽きようとしている。そんな自分にアレクのためにしてあげられることなんて何もなかった。もっとも、それまでも出来ることなんてなかったけれど…。

でも、自分のこの気持ちはアレクにとって重荷にしかならないのは分かりきっている。

たったひと月ほどの短い時間だったけれど、今まで生きてきた中でこれほど幸せだった時はない。

最後にもう一度、アレクのために歌いたかったけれど、瘡は顔全体に広がってしまって、それももう出来なかった。

リアは鉛のように重い右手を持ち上げて、アレクのその髪に触れようと手を伸ばす。けれど、アレクはそのリアの弱々しい仕種に耐え切れなかった様子で部屋を駆け出して行ってしまった。

嫌われてしまったのだろうか。そう思うと寂しさが込み上げてくる。でも、リアはそれで良かったのだと思おうとした。自分がいなくなっても彼には沢山の未来があるのだから、だから、これでいいのだ。

リアは一人きり、胸の奥がきりりと締めつけられるように痛むのを堪えながら、声を殺して泣いた。

アレクは、今にも目を閉じてしまいそうなリアを見ていられなくて、そこから逃げるように部屋を飛び出し、そして向かったのはファウストの部屋だった。

普段は決して彼の部屋に入ることはない。それはファウストが禁じているからではなくて、入りたくないからだったのだが、今はそんなことに構っていらなかった。

ファウストの部屋は幻影で包まれていて、それを見る者が想像するものが見えるようになっていた。魔法使いというものに対する嫌悪が強ければ強いほど、そこは異様な世界となるのだと言う。ファウストに恋する女たちには豪華な宮殿でも、敵意を抱く男たちには魔王の城のようなものだと、以前に聞いたことがある。アレクは別に魔法使いというものに偏見はなかったが、それでも極力近付くのは避けていた。

勢いよくドアを開け放つと、部屋の中央にファウストを見つける。その部屋はナルシストらしい独創的な装飾だったので、今のアレクにそれをゆっくりと鑑賞している余裕はなかった。ただ大きな鏡を見て、自分の描くファウストのイメージに苦笑する。

アレクがここへやってくるのを知っていたような素振りのファウストに、アレクは彼を臆することなくまっすぐに見つめた。

「リアの呪いを解いて、彼女を自由にして欲しいんだ」

何度も口にしようとして、その度に飲み込んできた言葉だったが、心を決めてしまえばそれは淀み無くすらすらとアレクの口から滑り出た。

「二年も私に付き纏って、あなたの願いはそれなのですか？」

ファウストは厄介な子供だなどとも言るように、半ば飽きられて、半ば面白がるようにアレクを揶揄する。

アレクは、そんなファウストの態度には慣れ切った様子で肩を竦めた。

「報酬は、僕にできることなら何でもする。リアを助けられる？」

「出来ぬことはないですが…、その時はお前の呪いはもう解けないかもしれません。それでもいいのなら」「あなたらしい遣り方だな。本音を言えば、呪いが解けないのは物凄く困る。二年も待ったのに、あなたは何もしてくれなかったし…。それでもいつかは元に戻れると信じていたからついてきたのに」

意地悪な魔法使いに対する皮肉も、彼にとってはたいした効き目はなく、その笑みを消すことも出来なかったが、ファウストはじっとアレクを見つめてきた。

「それでは、リアのことは諦めるのですね」

魔法使いの冷たい言葉に、アレクはにやりと笑う。

「いいよ。リアの呪いを解いて。彼女を助けてよ」

いざとなったらこの魔法使いに一生付き纏ってやろうと、アレクは決心していた。

彼女はきっと呪いが解けたら、ここからいなくなるだろう。そうでなければファウストの虜になり、自分には見向きもしなくなるかもしれない。その上、自分の呪いがこの先一生解けなくなるかもしれないのに、なぜか、アレクは清々とした気分だった。

「お人好しですな」

ファウストにそう言われた時でさえ、笑って答えることができた。

「これが性分なんだから、仕方がないさ」

強がりではないアレクの明るい声に、ファウストは笑みをおさめ、いつになく真摯な眼差しを向けてくる。

「では、行きましょうか」

アレクは、その呼びかけに一つ強く頷くとファウストとともにその部屋を後にした。

1 魔法使いと呪い

まっすぐな柱のような木々が並ぶ森の奥、泉の瀬の平らな大きな一枚岩の上に、ファウストは抱えていたリアをそっと横たえた。

水音は低く耳の底に響き、微かな風の音さえも耳を澄ませば聞こえてくるような不思議な感覚に包まれて、周囲を見渡したアレクは、不思議な光景を見る。

その泉には四方から常に水が流れ込んでいるのに、溢れる様子もなく静かな水面が揺らいでいる。空は見えず、重く垂れこめた枝は重なり合い密に繁るのに少しも暗さを感じないのは、地面がぼんやりと光を放っているせいなのだろうか。緑の苔が脈打つように光を明滅させる様子は、まるで大地が自分に語りかけているようにも見えた。

東の果ての森の奥がこんな風になっているのをアレクは初めて知った。入口付近の様子とは全くの別世界に、この森の不思議さを実感する。森の獣の気配さえない静謐な大気に包まれながら、ファウストが岩の上に複雑な文様を描くのを、手持ち無沙汰に見守るアレクは、これでリアは助かるのだと、ほっとしたような脱力感を覚えていた。

アレクは、ファウストが失敗するとは微塵も思っていなかった。現にファウストは、やるべきことを全て知っているかのように手早く呪陣を描き、泉の水を小さな陶製の壺に汲みそれに何かの呪いをかける。

アレクは、ファウストに何をしているのかと尋ねはしなかった。魔法使いでない自分に、理解できるはずもなかったし、彼女の側から離れていると言われなかっただけかもしれませんと思った。

ファウストは泉の水を指先に浸し、それを細かい霧に変えて彼女に振りかけた。

光を弾いた水滴が、虹色に輝き彼女を包み込む。空も見えない森の中に太陽の光は差し込まないのに、眩いばかりの輝きは更に強まり、そしてリアの全身を包み込むと一層強く輝いて、そして、ぱっと消えた。

だが、眩んだ目が見たのは、さっきよりもずっと酷くなったリアの瘡だった。大きく膨れ上がった固い瘡は彼女の形を歪め、灰色の大きな岩の塊と化していた。蛹か何かのような不気味な物体は、微かに脈動し辛うじて生きていることが分かる程度だった。

アレクは、説明を求めるようにファウストを見る。だが、そこに愕然とする魔法使いの姿を見た時、彼が失敗したのだと悟った。

「そんなはずはない…。私は正しかったはず」

蒼白な顔でファウストは呟き、そして苦虫を潰したような顔をしてそのままどこかに行ってしまう。彼がふらふらと森の中に姿を消してしまうのを茫然と見送りながら、アレクはリアを放って追いかけることも出来ずに途方に暮れていた。

それまで一度として見たこともないファウストの狼狽えようにアレクは戸惑い、どうすればいいのかなど分かるはずもなかった。

ただ、リアの側から動くことが出来なかった。

「ごめん…。こんなことになるなんて」

もう彼女の顔がどこにあるのかも分からず、その手を握ることさえも出来なくなっていた。

そんな姿になってもまだ彼女は死んではいないと分かるのは、規則正しく脈打つような光がそこから漏れるからだだったが、そんなことが慰めになるはずもなかった。

絶望、とはこのことを言うのだろうか。

アレクは初めて覚える無力感に何をやる気にもなれなかった。ファウストを嘔吐きだと罵ることは簡単だったが、それで彼女が元に戻ることはない。

森を照らしていた光さえも諦めたように消えてしまうと、周囲の木々が風に梢を鳴らす音が乾いた響きを立てた。

森閑とした森には空虚な風が漂い始め、項垂れるアレクの背後に黒い影が降り立った。

振り返ったアレクが目にしたのは、見たこともない魔法使いだった。

黒髪を後ろで一つに束ね、狼のように痩せた男は、ファウストのような華やかさこそなかったが、それなりに美しい男だった。だが、長い手足をだらりとさせた姿はどこか禍々しく、病んでいるようにも見えた。

「この呪いは誰にも解けぬ。あの方でさえこの有様だ」

今までのことをどこかで見ていたらしく、ファウストの失態を嘲笑う姿はとても楽しそうだったが、その若く力強い声はアレクには意外だった。その姿からは想像もつかないほど朗々と響く声は、力に満ちて、自信に溢れている。ファ

ウストの喋り方にどことなく似ているとも感じた。

黒衣に身を包んだ瘦身の男は、リアだったその塊を見下ろしながら、優しく語りかけ始めた。

「いつまでも強情を張るものではない」

その声に、リアだった塊が小さく震えたような気がした。

アレクが彼女を守るように魔法使いとの間に立つと、その魔法使いは、その時になってやっとアレクに気がついたとでもいう風に怪訝に眉を顰めた。

「なんだお前は…」

アレクは、目の前の魔法使いが、リアを呪った魔法使いなのだと思った時、心の底から憎いと思った。

沸々と込み上げてくるのは、魔法使いに対する怒りであり、それまでの恐怖にも勝るものだった。魔法使いが相手では、と、心のどこかで諦めていた自分を自覚しながら、アレクは毅然と顔を上げた。

だが、魔法使いの黒い瞳がアレクを苛立たしげに見下ろし、そして、アレクは次の瞬間空中に投げ出されていた。

何が起こったのか分かるより先に、地面に叩き付けられる衝撃に襲われ、アレクの視界は闇に染まる。

邪魔者がいなくなった岩の上では、魔法使いがリアの傍らに屈み込み、その固い瘡に包まれた身体を抱き上げようとしていた。だが、ファウストによって岩の塊となった彼女は思った以上に重く、動かせないと知った魔法使いは仕方なくその場で呪いを解き始めていた。

2 魔物と呪い

その微かな声は、確かに彼女のものだった。

『たすけて…』

耳に直接聞こえた訳ではなかったが、アレクは確かに彼女の声だと分かる。

苦悶に満ちて恐怖に震えながら、これから起こることへの嫌悪を込めた声は、アレクの意識を現実に戻すだけの力を持っていた。

魔法使いの前では無力に等しい己れを自覚しながら、それでも目を閉じてはいられない何かがアレクを強く衝き動かしていた。

柔らかな地面がその衝撃を吸収してくれたのか、アレクの手足はぎこちなくもしっかりと動いた。

『たすけて…』

再び助けを求める声を耳にして、アレクは立ち上がった。辺りを見回して、泉を挟んで向かい側にあの黒い影を認めると、アレクはその後のことも考えずに駆け出していた。

四方を岩で囲まれた泉は見た目以上に大きく、いつまでたっても彼女の元に辿り着けないような気がした。そして、突然目の前が開けて、黒い魔法使いの姿が見えた。

その腕の中には金の髪の少女がいる。

豊かな巻き毛は背を覆い、滑らかな白い肌と桜色の唇が今は恐怖に青ざめていた。

揺れる青い瞳には見覚えがあった。

それは、リアだった。

呪いを解かれ、美しく可憐な姿に戻った彼女だったが、そこに喜びは微塵も見えず、恐怖と絶望に震え、その魔法使いの腕を振り払うことも出来ずにいた。

黒い魔法使いが彼女を抱き上げ連れ去ろうとした時、アレクはその岩の上に飛び乗った。

忌ま忌まげにアレクを見下ろす魔法使いは、再びアレクを吹き飛ばす呪文を唱えようと口を開き、そして、その後立つ人影を見て眉を顰めた。

何も起こらないことを不審に思いながら振り返ると、少し離れた岩の上にファウストの姿を、アレクは見つけた。

紫紺の長いガウンのようなマントを身に纏い、その長い金の髪が奔流のように裾へと流れ落ちる様は、その視覚だけで他を威圧するようだった。普段から流麗なる装いを見せるファウストではあったが、この姿はそのどれよりも美しく威厳に満ちていた。そして、そのマントの細かな刺繍の見事さと文様の不思議に目を奪われながら、アレクはその場に凍りついたように動けなくなっていた。

「やあ、サイモン。久しぶりですね」

旧交を温めるかのような気安い挨拶に、サイモンと呼ばれた黒い魔法使いはリアから手を離し、姿勢を正して向き直る。

「貴方の魔法も堕ちたものですね。ファウスト。危うくこの娘を殺してしまうところだった」

サイモンという魔法使いの言うことはもっともで、アレクも同意見だったが、ファウストは少しも悪びれることなく、優雅に笑みを浮かべ楽しそうにサイモンに答えていた。

魔法に失敗して逃げ出したファウストが何故戻って来たのか。そんな奇妙な違和感の中に、アレクはファウストの真意を悟る。ファウストに騙された。そう思うと悔しさが一瞬込み上げるが、今はそれさえも許せるような気がした。だが、その彼の微笑みは曰くありげで油断がならない。

「そうですか？ その娘はまだ生きていますよ」

優しく笑めば笑むほど、何か裏があるような気がして身が竦む。

邪気のない笑顔であるにも拘らず、アレクは背筋に厭な汗が伝うのを感じた。それは、対峙する黒い魔法使いも同じなのか、彼の笑みに少したじろぎ、だが、すぐに気を取り直したようだった。

「それは、私が呪いを解いたからです」

黒い瞳が優越に浸り、満足気な笑みが口許に浮かぶ。

どうやら自分のかけた魔法をファウストが解けなかったことを思い出したらしい。だが、ファウストはそんなサイモンを悲しげに見遣り、首を振る。

「随分と歪んだ魔法を使いますね。愚かなことを」

「愚かですと？　そもそも魔法使いは人間に恋をしてはならないなどという決まりの方が不自然なのですよ。私たちだって源は人間なのですから。人間を愛してはならないなどという方が馬鹿げている」

アレクは二人の魔法使いに圧倒されながらも、その隙に黒い魔法使いの足下に震えるリアに近付いていた。

サイモンはファウストと対峙するのに全神経を遣っているのか、アレクが近付いても見向きもしなかった。そして、ファウストもその隙を与えることはない。

「あなたは、まだ気が付いていないのですか」

揶揄ではない憐みの声は、深く憂鬱な響きがした。

アレクはリアの元に辿り付き、そして彼女の震える肩を抱きしめながらファウストの声を聞いていた。

「彼の者の声も聞こえぬほど、心が離れてしまったというのですか」

「何が仰りたいのか、私には理解りませぬ」

「お前は伴侶をすでに選んだはずだ。その生涯をかけて守り、その命まで捧げると誓ったはずだろう」

サイモンはファウストの言葉に耳を傾ける意味すら見出せずに、ただ己れの欲求を満たすことだけを考えていた。

理を失った者に理をいくら解いたところで、所詮は螳螂の斧ということなのか。噛み合わぬ会話に飽きた若い魔法使いは、苛立たしげに足下の二人を見る。

彼の迷いのない澄んだ黒い瞳は、異様なまでにきらきらと輝いていた。

アレクは、恐怖のあまり硬直したリアをぎゅっと抱きしめながら、魔法使いの唇の動くのを見つめていた。

殺されるのかもしれないとも思ったが、それは意識の片隅に少しばかり浮かんだだけで、確たるものになる前にかき消えていた。

リアを失うと思った時に比べれば、大したことではなかったし、今はこうして彼女の側に居られるのだ。これ以上、何を望むだろう。だが、呪文は一向に発動せず、それに気付いたサイモンは、ファウストを憎々しげに一瞥すると、その岩からふわりと別の岩へと飛び移っていた。

「その二人に危害を加えるような魔法は全て無効となるように呪をかけてあります」

「それでは貴方を倒してから、あの赤毛の坊やを殺すことにします」

サイモンはそう言い終えるやいなや、ファウストの足下に向かって破砕の呪文を飛ばしていた。

ファウストはそれすらも予測していたというのか、実に優雅な動きで別の岩に飛び移った。

サイモンは間髪入れずに新たな呪を放ち、今度は荒れ狂う風がファウストを包み込む。鬱陶しそうに袖を払うファウストの長い髪が風に煽られて、同時に紫紺のマントが翻ると次の瞬間にはそこからファウストの姿は消えていた。

アレクは、初めて見る魔法使い同士の戦いに気押されながら、傍らのダリアをそっと見る。彼女は小刻みに震えながらずっとアレクの身体にしがみついたままで、周囲で何が起きているのか知らない様子だった。

何度か声をかけたけれど彼女の耳には届かず、ただその震えだけが時折激しくなる。

「大丈夫だよ」

と何度も呟きながら、アレクはありきたりな言葉しか言えない自分を叱咤しながら、戦いの行方を見守った。

狡猾なファウストの挑発に乗って、サイモンは次々と呪文を唱えては魔法を具現化していくが、それは何一つとしてファウストに届くことはなかった。

静寂に満ちていた泉の瀬は見る影もなく破壊され、周囲の木々も無残な姿になっていた。どこからその力がやってくるのかは知らないが、その力は無尽蔵に湧いてくるようにも見えて、果たして、この戦いに終局は訪れるのだろうか不安になる。

だが、ファウストが何の策もなしにこんな戦いを始めるはずはない。

アレクは二年の間、伴に過ごした魔法使いをその点では信じていた。

リアを瀕死にさせ岩の塊にしてしまった時には本当に落胆したし、失望もしたけれど、こうしてリアの呪いを解かせ、あのサイモンという魔法使いと戦う姿を見れば、そんな思いも消えてしまうから不思議だった。

3 魔物と呪い

ファウストは疲れを見せることなく魔法を繰り出すサイモンが、もう限界に近付いていることを知っていた。

理は悉く踏みにじられ、法則性のない破碎呪文はその形を確定させる前に崩れ落ち、新たな魔法もまたその残滓によって歪められる。その悪循環にさえ気付かずに、彼はファウストを殺すことだけを望み、その伴侶の煩悶さえ見えてはいない。

「メフィ」

小さく呟く声はファウストの他の誰にも聞こえるものではなかったが、その声に応えるものがあった。

家の居間に飾ってあった異形の面が霞のように現れて、ファウストのすぐ側に浮かぶ。

「どうやら君に頼らねばならないようだ。すまないね」

甘い囁きはこの場に不釣り合いであるにも拘らず、ファウストは現れた仮面を愛撫するようにそっと指を滑らせた。その仮面は靄のように形を崩すと、黒い霧に姿を変え、そして次の瞬間には大きな豹が現れた。立ち上がればファウストの背丈ほどもあるその黒豹は、ファウストの足元に頭を擦りよせて甘える仕種をする。

ファウストは、黒豹を慈しむように優しく撫で、そして黒豹はひらりと宙を舞った。そのままサイモンの背後の何も空間をその鋭い爪が一閃すると、この世のものとも思えぬ咆哮が上がり、姿を隠していた巨大な蛇のような生き物が姿を現した。それは今にもサイモンを一呑みにしようでもしていたかのように、その大きな口を一杯に開けていた。

その蛇の頭のすぐ後ろの辺りにファウストの黒豹の牙は深く食い込み、大蛇はそれを振り落とそうととぐるを巻いた尾を鞭のようにしならせた。その攻撃を器用に交わしながら黒豹は咬えた大蛇の頭を大地に叩きつける。大蛇は傷口から青い血を滴らせながら、何度目かの攻防の果てに動かなくなる。

ファウストはそれを待っていたかのように、呪文を早口に唱えた。

低い呟きは本人以外のものには聞き取れないほどの微かな音の連なりとなって周囲に響き、そして、使い魔を失った魔法使いの変わり果てた姿を悲しく見る。

黒く艶やかな髪は色を失い、その肌にも皺が刻まれていた。

意味不明な戯言がその口から呪いのように流れては落ちて、その度に干涸びてゆく己れの姿にさえ気付かないサイモンは、その瞳だけがぎらぎらと生気に満ちて、ファウストに憎悪の眼を向ける。

サイモンを倒すのは造作もないことだった。すぐにそれをしなかったのは、彼の伴侶である魔を野放しに出来なかったからに過ぎない。主を失った魔は元の界に戻ることも出来ず、狂ったように暴れてこの界を歪めてしまう。だが、魔法使いに因って形を与えられている間であれば容易に滅することは出来る。

彼らの暮らす無形の世界は力に満ちて、全ての命はここから生まれ、そして、ここへと戻る。

魔法使いは形のないものに形を与え、そして名を与えて彼らを支配する。そして、その力を得る代わりに、異界からの魔に対して敬意と愛を捧げる。

異界から彼らを連れ出したのは人間の方であって、彼らが悪いのではない。

「彼らは移り気な人間を決して許しはしない。何も知らない彼らに形を与えたのは我らの責。その生涯を捧げる覚悟のないものに魔を使う資格はない」

ファウストの声に何の感情もなかった。

その表情は堅く、元は人間だったものの残滓を見下ろした。そして、ファウストは全てを断ち切るように胸に十字を切る。

形あるものは塵に。

光を無くした魂には安息を。

そして、この世の理に敬意を。

サイモンであったものは、その言葉の終わらぬうちに形を無くし、小山のような灰と成り果てていた。

最後まで正気に戻ることなく逝ったサイモンは、ファウストが導いた者の一人だった。

魔を望む人間は大抵、人間を嫌悪している。虐げられ苛められて、人間社会から弾き出されたものがその大半だった。そうして力を手に入れたところで人間の仲間になど入れて貰えないし、人間よりも長命な分、狂気もまた激しさを増す。所詮、人とは交われぬ生き物なのだと、何度諭したことだろう。

ファウストはこうして葬ってきた同胞たちの記憶とともにサイモンを心の奥底に埋葬した。

4 魔物と呪い

魔法使い同士の戦いの幕切れは、意外なほどに静かに決着した。

アレクは、塵と化した魔法使いを見下ろすファウストを見ていると胸が痛んだ。

その端正な顔には苦痛も悲しみも浮かんではいなかったが、その表情には覚えがあった。

それは、王が失態を見せた部下を断罪する時の顔とよく似ていた。どんなに信頼していても人間という生き物はとても誘惑に弱く、してはならないと分かっている悪事を働いてしまう。だが、自分の配下である者に対して王は責任がある。自身の感情を殺しても、通さなければならぬものがあるのだと、父は言っていた。

じっと佇むファウストの元に、呼び出された黒豹がゆっりと歩み寄り、その膝の身体を擦り寄せるとファウストは、優しくその黒豹に微笑んだ。黒豹はファウストをじっと見上げると、その姿を小さな黒猫に変える。ファウストはその黒猫を抱き上げて、肩に乗せるとこちらを見た。

アレクはその視線で魔法使いたちの繰り広げた白昼夢から醒めた。

いつのまにか抱き合っていたリアのその柔らかさに気が付き、思わず頬が熱くなる。今でもリアの身体を支えるために何度も触れていたはずなのに、今の彼女はとても柔らかくてふわふわしていて、まるで骨がないみたいで、どうしたらいいのか分からない。

唐突にアレクはリアから離れていた。

衝動的に飛び退いてから、その時になってアレクは彼女をまっすぐに見た。

水面に揺れる日の光のようなきらめく金の髪と、クリームのように滑らかで白い肌。青い瞳の色はサファイアのように深い光を湛えて心の奥まで見透かされそうだったが、その瞳は今はアレクではなくファウストの方に向けられていた。

彼女の背負ってきた重い枷は解き放たれ、本来の姿に戻ったことに喜びを感じるとともに、羨望と嫉妬が渦を巻く。そして、呪いが解けた今、自由の身になった彼女に自分は必要ない。

彼女が不意にこちらを見た。

「アレク、」と小さく呼ぶ声がした。

アレクは、まだ事態がよく飲み込めていない様子で戸惑うリアに、無理に笑顔を作った。

「呪いは解けたんだ。良かったね。これで君はもう自由なんだ」

アレクのその言葉で、リアは自分の手を見つめ、そしてその身体を確かめ、信じられないという風に目を見開いた。再びアレクを見つめる彼女の喜びに溢れた優しい瞳に、アレクは目を逸らしていた。

ファウストが、ゆっくりと近付いてくるのを見てアレクは岩から飛び降りていた。

「約束通り、彼女の呪いを解いてくれてありがとう」

少しも嬉しそうではないアレクのその様子に、ファウストは当然だという態度で一つ頷く。

「最初彼女が岩ようになってしまった時にはどうなることかと思いましたが、皆を騙していたんですね」

「こちらにも事情があったものでな。だが、狼狽える私の姿というのも面白かったのではないかと」

「それどころじゃなかったことくらい知ってたんでしょ。あの魔法使い、狂っていると言っていました、どういう事です？」

「サイモンは、人間の依頼で彼女に呪いをかけたはずだった。だが、呪うはずの彼女の歌声に心を奪われその呪いを曲げた。本来、魔法使いは人間に対して嫌悪と憎悪しか抱くことはない。だから非情な呪いも躊躇なく行えるはずだった。だが、たった一度の過ちで狂気に捕らわれる。悲しいことだ」

「人間に恋をするだけで狂うのですか」

アレクは初めて聞く意外な魔法使いの不文律に戸惑う。

ファウストは軽く嘆息して、そして面倒臭そうに話し始めた。

「魔法使いの使う人外の力は無から生まれるのではなく、異界の魔物たちとの契約によっている。その契約は婚姻と似たようなもので、異界からこちらへ魔を迎える為に魔法使いはその生涯を掛けて彼らに責を負う。もしそれを怠れば、彼らは自分を縛る魔法使いを決して許しはしない」

魔物とは、先ほどの黒豹たちのことなのだろう。ファウストの使い魔はこの二年の間、一度もその姿を見せたことはなく、アレクは初めてその姿を見た。今は普通の黒猫に姿を変えファウストの肩に乗り、冷やかな視線をこちらに向

けていた。

「あの魔法使いは彼女に恋心を抱き、破滅したということですか？」

ファウストは黒猫の喉をくすぐるように撫でながら、それまで見せたこともない笑顔を黒猫に向けた。

「自分の使い魔を忘れ、人間などに心を傾ければその理を失うことになる。理のない人間に魔法は危険な力となる。己の欲の為に力を濫用すれば、それは狂気の沙汰としか言い様がない。それに、あのまま放っておいても彼は自分の使い魔に殺されていた。そして、この世で自由になった魔は禍根となる」

ファウストはそう呟き、そして、リアを見る。

アレクは彼女を直視出来ず、咄嗟にファウストの気を彼女から逸らそうと口を開いた。

「彼女を呪った人間とは誰なんですか」

ファウストはそんなアレクの姑息な意図など見通しているかのように、視線をアレクに戻した問いに応えた。

「それを知ったところで意味はないのでは。呪いが解かれた時点で、その力は呪った人間の元へゆく。人間は自分の醜悪な部分を全て魔法使いのせいにして、自分の手は汚さずに他人を陥れる。そのくせ呪った相手が呪いを解くことを信じない。もっとも大抵の人間は他人を呪うことは自身にも同じ呪いをかけることだと本能的に知っているものだが」

「それだけ人間は業が深い生き物だということですか」

アレクは、ファウストがそれを口にしようとしなないのは不要な憎しみを自分に抱かせない為というよりは、ただその後のいざこざが面倒なだけのような気がした。他人を呪った人間をいくら罰しても、その中にある憎しみまではどうすることも出来ないということなのかもしれないとも思う。それに、理不尽な状況に追い込まれながら、それでも生きることをやめられない自分の方が余程、業が深いのかもかもしれない。

今も、自分はリアをファウストに奪われない為に必死に足掻いている。

勝ち目のない戦いばかりに、自分の非力さが今ほど惨めに思えたことはなかった。

「彼女は随分と器量よしだな。あの姿にあの歌声ならば、周囲の男たちは放っておかないだろう。だが彼女はあまりにも内気で自分を知らなさ過ぎる」

確かに、アレクの知っている彼女はお世辞にも社交的とは言えず、歌以外何の取り柄もないように思っているようだった。醜い瘡に顔を隠されていればそれも仕方がないのだろうが、それまでとのギャップが激しすぎて、どうにも目の遣り場に困ってしまう。

これまでも憧れた女は何人かいたけれど、こんな風に戸惑いを覚えたのはリアが初めてだった。そして、これほどファウストが恨めしく、憎く思ったこともなかった。

そんなアレクの鬱屈した思いを感じたのか、ファウストは面白そうにアレクを見て、そして彼女のいる岩場へと足を向けた。

「さて、彼女が一人で途方に暮れているようだ」

アレクの横を擦り抜けたファウストの外套から微かに香が薫り、アレクはその場から動けずにその背を見る。

そして、その向こうにリアと目が合った時、アレクは脱兎の如く走り出していた。

1 最後の願いごと

静寂の降りた森の泉の様子に、リアの震えもいつの間にか消えていた。けれど、ずっと側で抱きしめていてくれた温もりが突然消えてしまうと、リアは急に心細くなる。

アレクの戸惑った顔がリアの不安を掻き立てた。

ファウストという魔法使いが呪いを解いてくれると言って、ここに来たのは覚えていたが、その後のことが全く分からない。

茫然とするリアの頬を風が撫で、そして背中にさらさらと流れる自分の髪に気が付いた。ゆっくりと自分の手に目を落とし、あんなに酷かった瘡が消えていることに驚いた。

再びアレクを見ると、アレクは笑っていた。

「良かったね」

そう言われて、やっとその実感が湧いてくる。だが、「君は、もう自由なんだ」と、そう言われて、途方もない孤独を感じた。そして、アレクはそのまま岩から飛び降りると、ファウストの元へ行ってしまい、リアは一人ぼっちになっていた。

呪いが解けたというのにどうしてアレクは自分のことを避けるのだろう。

そう考えた時、リアは元に戻った自分の姿があまりにも醜かったのだろうか、ふと思う。呪われる前はそれほど酷いとは思っていなかったけれど、この二年の間に変わってしまったのかもしれない。そう思うと怖かった。

少し身を乗り出せば姿を映す泉がそこにあるのに、自分知らない顔になっていたとしたらどうしようと思うと、怖くて覗くことが出来ない。

顔に黒いあざが広がって、それ以来鏡を見ることはなくなっていた。

自分が恐ろしい化け物になっていくのを見たい娘なんていないし、実際に自分は他の人間たちに疎まれてきた。自分が醜く卑しい人間なのだとずっと思ってきたはずで、呪いが解けたところで何も変わらないのかもしれない。呪いなんてものがなくても自分は、きっとこうして人から疎まれるのは変わらなかったということなのだろう。そして、アレクが優しくしたのは、きっと自分があまりにも惨めでみっともなかったから哀れんでくれただけなのだ。それを勘違いして、自分は何を期待していたのだろう。

これが自由というものなのだろうか。

ずっと呪いを解く為に旅を続けてきたはずなのに、母も父も無くして、帰る家さえもない現実はとても残酷に思えた。

呪いが解けたら何もかもが全てうまく行くような気がしていた自分に、今更ながら気が付いて、そしてまた自己嫌悪する。

アレクや魔法使いに甘えるだけで自分では何もしていない自分がいた。愚かで浅はかで、こんな自分が生きている値打ちはあるのだろうか。

アレクは魔法使いと何かを熱心に話し込んでいて、さっきからこっちを一度も見ようとはしなかった。それが余計にリアには悲しい。そして、呪いが解けてもその喜びを分かち合う人がいないのなら、それに何の意味もないのだと気が付いた。

でも、いつまでもここで座り込んでいてもどうしようもないのは確かだった。瘡は消えたのだから、もう自由に動ける筈だった。

立ち上がりようとして、身動きした弾みで堪えていた涙が岩を濡らした。

こちらに近づく足音を聞いて、リアは急いで涙を拭い顔を上げた。

魔法使いの肩に留まる黒猫がひらりと飛び降りて、ダリアの膝に乗る。そして、リアはファウストの後ろにアレクを見る。

視線が絡んだ刹那、彼は森の中に走り去ってしまい、リアは声のない悲鳴を上げた。

いつまでもアレクの消えた森を見つめるリアに、黒猫がそっと伸び上がりその柔らかな掌を肩に置くが、リアはそのまま動けなかった。

「アレクのことを気になる？」

魔法使いにそう問われて、リアは諦めたように彼に視線を向けた。

「私は、アレクに嫌われてしまったみたいです。私の姿はそんなに醜いのでしょうか」

リアは魔法使いと二人きりでも、以前のように怖いとは思わなかったが、彼の美貌にときめくこともなかった。

「自分で確かめたらいい。お前を悩ませていた魔法使いはもういないのだし、自由に動けるはずだ」

「でも、アレクには迷惑かもしれない」

言いながらまた涙が零れて、頬を伝っていた。黒猫がリアの涙に濡れた頬をキスするように顔を寄せて、その滴を舐めていた。リアはそのざらざらとした感触に少し驚き、その黒猫を見た。

「メフィはお前が気に入ったようだ。私以外の人間の膝に乗ることは滅多にないんだ」

「でも、私は…」

膝の上の黒猫が問いかけるようにその金の目でリアを見上げ、リアはそれ以上言えなかった。

「アレクが何故、私と旅をしてきたのか、その理由を知っているか？」

「いいえ」

「普通、魔法使いと行動を共にする者は、やがては自分も同等の力を得たいと望むからだ。だが、アレクは魔法を必要としていない。自分が人間であることを望み、人間であろうとしていた」

確かに、アレクは魔法使いのことを快くは思っていなかったけれど、リアのように嫌悪しているというふうでもなかった。不思議には思っていたけれど、それを尋ねたこともなかった。

「では、どうしてアレクは貴方の側から離れないのですか。貴方が彼に何かしたの？」

リアはそう言いながら、それは違うような気がしていた。そして、膝の上で自分をじっと見つめる黒猫の金の眼を見ているうちに閃くものがあった。

「アレクも、魔法使いに呪われているの？」

それならば辻褄が合う。

これまでに五人もの魔法使いに会い、ファウストがそれまでの中で一番の魔法使いだとも言っていた。何か事情があるとは感じていたけれど、呪われている人間はそのことを口に出せないのだ。

自分がそうだったように、アレクもずっと苦しんで来たのだとしたら…。

リアだけ呪いが解けたことを喜べない気持ちも分かる。

「どうすれば呪いを解けるの？」

そう問いかけながら、リアは必死に考えていた。

ずっとアレクと過ごしてきて違和感があった。それが呪いのせいだとしたら、そこに何かあるはずだ。

リアは、それまで深く悩んでいたことも忘れ、真剣な眼差しでそれまでのことを思い返していた。

メフィと呼ばれていた黒猫が、リアを励ますようにじっと思慮深い眼を注ぎ、リアはその眼に励まされるように呟いた。

「アレク…」

リアのように見た目ですぐに分かる位なら出会った時にすぐに分かるはずだった。赤い髪は珍しいものではないし、緑の瞳との組合せはとても綺麗だった。何年も魔法使いと共に過ごしてきたと言っていたけれど、今のアレクの外見からはそんな年齢とはとても思えなかった。それに、リアよりも知識が豊富で、家事も手慣れていた。そして何度、自分よりも大人のように感じただろう。

「年齢を止められているの？」

いつまでも大人になれないまま、ずっと時を止められ、それを何とかして欲しくてファウストの従者として、一緒にいたのだとしたら…。一体、何年の間、彼は苦しんで来たのだろう。

「ただの人間にも魔法は使えるって知っているかい？」

魔法使いが謎を解いたリアにそんなことを言う。

見上げた彼の顔は穏やかで、どこか老いた優しさを湛えていた。

「どんな魔法使いにも出来ない魔法を、君がアレクにかければいい」

リアは、ファウストが言おうとしていることが何なのか分かった気がした。けれど、自分はそんなに立派な人間ではないし、アレクに拒絶されたらと思うと怖くて足が竦んでしまうだろう。

でも、今度は自分が何かをする番だった。

「私、魔法は嫌いな」

リアはそっと黒猫を膝から下ろし、その頭を撫でた。

「ありがとう」

無言の慰めをくれた黒猫に心からの感謝の言葉を告げながら、リアは自分の足で立ち上がった。

「アレクの所まで連れて行って欲しいというのは難しい願いかしら」

眩くリアに、ファウストは皮肉な笑みを浮かべた。先ほどまでの老成した雰囲気は一掃され、見慣れた顔がそこにあった。

「魔法は嫌いなのだろう」

意地悪な口調と蔑むような視線を向けられて、リアは彼の言う通り魔法に頼るのは間違っていると思い直した。

この広い森の中をどうやって探せばいいのか、不安が過る。けれどそれはほんの一瞬のことで、リアは岩から滑り降りていた。

今の自分に出来るのは、アレクを捜し出して、共にその呪いを解く方法を見つけることだった。自分がアレクに貰ったものに比べればほんの些細なことではしかないけれど、呪いが解けたことで初めて自分以外の誰かの為に何かをしたいと思ったのも本当だった。

すらりとした姿のよい木の並ぶ森はまるで人の手に因って整えられたかのように見えた。不自然なほど美しいその森を抜けると、いつの間にか見覚えのある振れた大木の森に入っていた。

森は静かで、恐ろしい獣たちの気配はなく、木の根が張り出した地面はリアの足を傷つけることはなかった。

違う景色の中を歩きながら、リアは魔法というものについて考えていた。

自分を苦しめ、全てを奪ってしまったのも魔法だったが、こうして再び自分の足で歩いていられるのも魔法のおかげだった。その上、呪いが解けても、想像していたような幸福感はなく、失ったものばかりを数えていた自分だったのに、大嫌いだったはずの魔法使いに慰められ、こうしてアレクを探している。

いつか一緒にその喜びが分かち合えたならその時、やっと全ての呪いは解けるのかもしれない。そう思うことでこの寂しさをどうにかしたかったのかもしれない。

泉の瀬から歩き出して二時間ほど経ただろうか、リアは道に迷っていた。

自分が今どの辺りを歩いているのかさえ分からない。これではアレクを見つけるより先にこの森の中でおばあさんにもなってしまうような気がしてきた。

ごつごつとした木の幹は光の加減で人の顔のようにも見えて、そのどれもが見覚えのあるような気までしてくる。ここで立ち止まるのは怖かった。

二度とアレクと会えなくなるかもしれない。そんな思いが何度も頭の中に浮かんでは歩みを鈍らせ、それを打ち消しながらリアは森の中を彷徨い続けた。

2 最後の願いごと

アレクは、リアの父の墓の前にいた。

リアに歩み寄るファウストを止められない代わりに逃げ出して、結局は未練がましくこんな所にいる自分を嘲笑う。アレクが彼女を死なせたくなかったのは、自分を頼ってくれる人が欲しかったからであって、彼女自身の自由の為なんかではなかった。けれど、彼女を一人占めして他の誰にも渡したくなかったはずなのに、彼女の命を救おうとして結局は彼女を失った。

こんな自分には道化のような恋が似合いだということなのだろう。恋をするということが、こんなに惨めで辛いことなのだと知らなかった。

小さな手は無力さの象徴のように厳然として目の前にあり、蝶が蛹から羽化するように生まれ変わった彼女とは雲泥の差だった。

彼女が眩しくて見ていられずに逃げ出たくせに、彼女のことばかり考えている自分が可笑しかった。

どれくらいの間そうしていたのか分からなくなった頃、近づいてくる足音に気が付いた。

ファウストだろうと振り向いたアレクは、そこにずっと思い続けてきた人を見て茫然とした。

「アレク…。やっと見つけたわ」

リアは以前のように顔を隠すように、泉まで運ぶのに使った毛布を頭から被っていた。呪いは解けたはずなのに、何故そんな格好をしているのか、アレクには分からなかった。

「森の中で迷ってしまって、もう会えないかと思った」

今にも泣きそうな声でリアは言う、その場に座り込んでいた。疲れ切ったその様子にアレクは手を差し伸べそうになり、そしてその手をぐっと握りしめていた。彼女にはもう自分の助けは要らないのだ。

「私、自分だけ呪いが解けて助かったって少しも嬉しくなかった。最初は驚いたし、生きてるだけでほっとして、なのアレクは一人でどこかに行ってしまうし…」

リアはいつになく饒舌で、でもその声のアレクはまた幸福を感じて想いは募る。けれど、彼女が自分を探して森の中を彷徨ったことを自分の都合の良いように勘違いしてしまいそうで、もうこれ以上何も聞きたくないような気さえする。それなのに、リアはそんなアレクの胸の内を更にかき乱すようなことを言う。

「私だけが自由になれたって意味はないのに、もっと早く気が付いていればこんなふうのアレクを苦しめることもなかったのよね。私だけが不幸な訳ではなくて、もっと苦しめる人だって沢山いてその誰もが救われる訳ではないのに」リアはやっと落ち着いたのか、頭から被っていた毛布を払い落とすと、また立ち上がっていた。呪いが解けたのは夢ではなくて、本当に彼女は綺麗だった。そしてアレクは、彼女を見ているのが辛いのに、その姿から目を逸らすことが出来なかった。

「私は自分のことばかりで、どうしようもなく馬鹿で、歌うことしかできないのに…、アレクには迷惑なだけなのも分かってる。でも、このまま会えなくなるのは厭だから」

そして、リアはアレクをまっすぐに見た。

アレクは彼女が何を考えているのかさっぱり分からず、だが、彼女が何をしようとしているのか確かめたくてその場を動けなかった。

リアはアレクの前にふわりと風のように近づいて、そしてその瞳をじっと覗き込んでいた。

深く透明な青い瞳にはアレクの顔がはっきりと映し出され、そして、アレクは彼女が全てを知っていることに気が付いた。

「私、あなたの呪いが解けるまでずっと一緒にいるわ。何年かかっても、どんなに迷惑でも」

まっすぐな彼女の瞳に見つめられてアレクは俯いた。

「そんなことをする必要はないよ。君はもう自由なんだし、ファウストなら今後の身の振り方だってちゃんとしてくれる」

自分に付き合って時間を無駄にするなんて全くの無意味なことではかない。そんなもののためにファウストに願ったのではなかったし、ファウストにはもう頼めない。自分の解呪と引換に彼女の呪いを解かせたのだ。そのことにアレクは少しも後悔は無かったし、リアを恨んでもいなかった。

けれど、拒み続けるアレクに、リアは諦めなかった。

「アレクが私を嫌いでも、私はアレクのことが好き」

リアの言葉は優しくアレクの耳に届いた。

疑いようのない声音に、アレクは彼女を見上げた。そして静かなその瞳の中に自分の姿を見つけた時、不意に身体をざわざわとしたものが下から上へと走り抜けた。

弾かれたようにその場に蹲ると、身体のおちこちから何かが流れ出て行くような感覚を覚え、妙な浮遊感の中に意識が飲み込まれていく。

自分の身に一体何が起こったのか、考えるゆとりなどそこにはなくて、アレクは、ただ流されないように必死に薄れていく意識の欠片にしがみついていた。

それは一瞬の出来事だったと後でリアが言っていたけれど、アレクにとっては永遠にも思えた時間だった。

「アレク…」

リアのその声で我に返ったことは覚えていた。

次に地面に座り込んだ彼女の姿を見た時に、アレクはこれまで感じたことのない爽快な気分でその場にいた。

目の前の彼女が小さく見えることに違和感を覚え、そして自分の方が大きくなったのだと気が付くのにな程時間はかからなかった。いつも恨めしく思っていた小さな手は逞しい男の手になっていた。その手で自分の顔や身体を確かめると、それが現実なのだとやっと思えた。そして、自分が酷い格好をしていることにアレクは慌てた。

それまで着ていた服は当然の如く小さすぎて、原形を留めていない服はぼろぼろに千切れ裸も同然だった。

リアは目の前で呪いが解ける様子を見ていたのか、アレクよりもずっと茫然として惚けたようになっていた。アレクは彼女が正気に戻る前に、慌てて彼女が被っていた毛布を身体に巻きつけていた。

元の年に戻ったアレクにはその毛布は少し小さくて臍が隠れはしなかったが、無いよりはましだった。そしてアレクが、まだ放心しているリアの側に跪くと、リアは少し怯えたように瞳が揺れた。

アレクは彼女が逃げ出してしまいそうで、その手を優しく捕まえた。自分の身体なのにまだうまく使える自信がなくて、アレクは彼女を傷つけないように細心の注意を払ったが、それでも彼女の小さな手はほんの少し触れただけで壊れてしまいそうで怖い。

少年から青年へと一飛びに成長してしまったアレクは、リアの思っていた通り魅力的な青年に変貌していた。

赤い髪は少し色を薄くして金の輝きが増し、涼しげな目許はエメラルドの緑に森の悠然さを湛えていた。幼い顔立ちが消えてしまったけれど、代わりに精悍さが現れ、意思の毅そうな口許には今は微笑みがよく似合う。

「君は僕のことを好きだと言ってくれた。僕もそれに応えなければならないね」

アレクは自分の低い声に初めは戸惑ったものの、その違和感にもすぐに慣れた。

だが、じっとこちらを見つめるリアの顔に笑みはなかった。アレクはその視線が少し気になったが、そのまま続けた。

「僕も君のことが最初から好きだった。一緒に僕の故郷へ来てくれるかい？」

「私、歌う以外何も出来ないのに？」

「王宮に戻れば歌う以外にやることはないし、僕の側でずっと歌ってくればそれでいい」

「王宮？」

不安そうに呟くリアに、アレクはリアに話したいことが沢山あるのだと告げた。

「でも今は、きちんとした服と温かい飲み物が必要だとは思わない？」

悪戯っぽく笑う瞳に、リアはやっと笑い、小さく頷くと二人は手を取り合って魔法使いの家まで戻った。

3 最後の願いごと

家に戻るまでにそれまでの違和感は徐々に薄れ、本当の恋人同士のように手を取り合う二人は、テーブルの上に用意された二組の服を見て、目を見合わせていた。

「結局ファウストは全部知っていたということか」

アレクが飽きたように呟くと、リアはその美しいドレスを手にとってそれを胸に抱きしめて涙ぐんでいた。

「素敵な贈り物ね。私たち、彼にはとても良くして貰ったのに、お礼も言わせてくれないつもりかしら」

二人の他は誰もいないこの小さな家で、リアは最後まで意地悪な魔法使いに言葉を途切らせていた。

「ファウストらしいといえば、らしいけど」

アレクは、服の傍らに手紙と小さな皮の袋を見つけてそれを開けていた。

袋の中からは指輪が二つ入っていた。白金の輝きを放つ幅の広いその外側には見事な彫金が施されていて、裏側にはそれぞれにその名が彫り込まれていた。

アレクはファウストからの手紙を手に取りそれに目を通すと、その指輪を手にとってリアに向き合う。

リアは、その真摯な眼差しを不思議そうに見上げていた。

「王宮で君は窮屈な思いをするかもしれないし、もしかしたら僕はその王宮にすら戻れないかもしれない。それでも一緒に来て欲しいと言ったら、君は来てくれるだろうか」

普通の人間には未来視の力なんてないから、未来のことなんて何も約束は出来ないけれど、この心に偽りは一つもない。アレクは、ファウストからの手紙をリアに渡し、その応えを待った。

リアは渡された手紙に目を通し、そして、その指輪を見つめた。

運命を左右するもの。もしかしたらこの先、永劫に縛られるかもしれない。そんな魔法のかかった指輪は、二人の間で鈍く光を放っていた。

魔法が嫌いなのは今も変わってはいない。けれど、魔法が存在することを自分たちはよく知っていた。そして、その指輪はファウストの残した最後の呪いなのかもしれないとも思う。

アレクに王宮に来て欲しいと言われて揺らいだ自分がいたことをリアは不安に感じていた。贅沢な暮らしがしたくてアレクを選んだのではない。ただ未知の世界に対してしり込みする自分と、迷う心が返事を躊躇わせるのだ。けれど、その手紙を読んでリアは、その指輪を手にとっていた。

アレクはそれを返事と受け取った。

そして、二人は互いの指にそれを通していった。

それは敬虔な儀式であり、己れ自身の決意の顕れでもあった。

リアはアレクを必要としていたし、アレクもまたリアを必要としていた。譬えそれが一瞬の恋から始まったものであったとしても、この瞬間からそれは永遠のものになる。

ファウストの手紙には、二人の未来に幸いあれとあった。そして、その指輪は互いを縛るものではなく、自分自身の心を戒めるためのものだともあった。

人は決して心の全てが一つに重なることはなく、永遠に孤独な生き物だ。だが、心は伴侶を求めるものでもある。互いが互いのことを想う限り、その指輪は永遠に二人を繋ぐ総となる。それが呪いとなるか祝福となるかは誰も知らない。けれど、二人が幸福であることを願っている。手紙はそう結ばれていた。

二人の指に詠えたように馴染む指輪は命を宿したように淡い光を纏い、二人の瞳に同じ光が燈のように浮かんだ時、二人は幸福に微笑んでいた。

そしてアレクは、彼女にそっと顔を寄せ優しく口吻をした。

終章

その後ファウストは、二人と二度と会うことはなかったが、二人が王宮に戻ったと風の噂で耳にした。

王宮での暮らしは薄氷を踏むようなものであったが、リアはその務めをよく果たし、アレクの為だけに歌を歌ったという。だが、それから五年後、彼女は姫を一人残してこの世を去った。その原因は、産褥だという者もいたし、魔法使いに呪われたせいだと言う者もいたが、王宮の暮らしに馴染めなかったからだと言う者もいた。リアが何を感じていたのか今となっては知る術もない。

王子の嘆きはとても深く、その後も別の姫を後に迎えるが、その指からファウストから贈られた指輪が外されることはなかったと言う。

ファウストの使い魔であるメフィは、そのことを思い出す度に理を曲げているのは彼の方ではないかと思いつく思うが、アレクとリアの恋の行方はメフィの気に入りの物語の一つになっていた。

アレクの呪いを解くはずだった姫は、それに気が付きもせずに簡単にファウストの策略に堕ち、恋に破れ、その役目を果たせずに終わった。そして、アレクを呪ったその姫の母親である中の宮の王妃は、醜く老いさらばえてその後人前に姿を晒すことはなかったと言う。他の姫と婚姻させない為にアレクを呪い、自分の娘にその呪いを解かせ結婚させたかった王妃の目論見は、アレクに知られることはなかったが、その真相を知ったアレクが知ったら、大変なことになっていただろう。

東の果ての森でリアを見つけた時、ファウストはサイモンのしたことを悟った。リアの歌声は、とても素敵で、メフィは何度もそれを耳にしていた。あの歌声が一人の魔法使いを狂わせ、そして魔物から主を奪った。だが、アレクのために歌うリアは、とても幸福そうで、だから無償であの指輪を二人に与えたのだとメフィは解釈していた。

呪われなければ出会えなかった二人に、最後の魔法をかけたのは、二人の前途は決して平坦な道程ではないことをファウストは知っていたからだ。だから少しだけその力を分け与えた。

今生では幸福になれなくとも来世ではきっと…。

ペンデュラムとは海を隔てた遠い異国の地で小さな城を構え、その寝室の豪華なベッドで一人午睡する美しい魔法使いに、メフィは甘えるように身体を擦りよせていた。

この異界に住み着いて随分と様々な人間を見てきたメフィだったが、ファウスト以上に興味深い人物にはまだお目にかかったことはない。

優しいのか、意地悪なのか。

真摯なのか、気紛れなのか。

退屈が嫌いで、美しいものが好きで、若い娘を口説くことを生き甲斐にしているような人間なのに、メフィにとっては唯一無二のものなのだ。そして、ファウストにとっても自分が一番大切なものなのだとメフィは知っていた。

黒猫の姿で、この美しい男を独占していることに優越の笑みを浮かべて、メフィは優雅に一つ伸びをして愛しいその魔法使いにそっと鼻先でキスをした。

魔法使いとカナリア

<http://p.booklog.jp/book/16944>

著者：荻塑做沙 ogisosasa

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/ogisosasa/profile>

発行所：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/16944>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/16944>